

コンピテンシー・ベースのカリキュラム開発(2)

— 「本質的な問い」とパフォーマンス評価の充実 第16回公開教育研究大会を受けて —

Developing a Competency-Based Curriculum 2

— “The Essential Questions ” and Enhancement of Performance Assessment

to Take a Step Forward After the 16th Open Seminar for Teachers —

研究部

齋藤 洋輔 浅田 孝紀 小川 乃絵 栗山 絵理 齋藤 祐一
佐藤 亮太 成川 和久 浜田 伴子 光田 怜太郎 楊田 龍明

<要 旨>

中央教育審議会によりまとめられた答申によると、次期学習指導要領では、「資質・能力の育成」の観点がより強く反映したものになると言われている。そのような背景のもと、本校も昨年度（平成28年度）より「コンピテンシー・ベース」のカリキュラムづくりに注力している。そして、本年度の公開教育研究大会では育成すべき生徒として「3つの生徒像」を、育成すべき資質・能力として「5つの重点課題」を設定し、本校における教育研究の構造を整理した。また、各教科・科目の公開授業では生徒の資質・能力の変容を抑えるよう「パフォーマンス課題」を単元内に設定した。今年度の実践を経て、パフォーマンス課題の充実を図ることができたが、課題も顕在化した。そこで今年度の課題を踏まえ、次年度は各教科・科目がさらに資質・能力の育成を重視したカリキュラムづくりに取り組んでいきたい。また、次期学習指導要領の改訂も見据えながら、学校全体で教育研究の方向性も引き続き模索していきたい。

<キーワード> コンピテンシー・ベース パフォーマンス課題 ルーブリック カリキュラム・マネジメント
“本質的な問い”

1. はじめに

平成28年12月、中央教育審議会答申（文部科学省、2016；以下、答申と表記）が示され、現在、次期学習指導要領の改訂に向けての準備が急がれる時期である。答申には、「資質・能力」という語が至る所に見られ、学校の教育活動全体を通して生徒の資質・能力（コンピテンシー）を育成することがこれまで以上に強調されている。また、「主体的・対話的で深い学び」や「カリキュラム・マネジメント」といった指導方法や学校運営に関わるキーワードが多く並ぶ点も、これまでの改訂とは異なる特徴と言えよう。このようなコンピテンシーの育成という議論は、学校教育が育成すべき、社会に有望な人材とはどのような人材なのか、また学校教育の教育課程全体を通して、どのように人材を育成しているのか、という根本的な問いによるものである。

また、上記のような高等学校の教育改革に並行して、「高校生のための学びの基礎診断」や「大学入学共通テスト」をはじめとする高大接続改革も進んでいる（文部科学省、2017aなど）。高等学校の“出口”にあたる大学入試と連動的に変革させることで、高等学校における

教育変革を実のあるものにしようとしている。

さらに、「国立教員養成大学・学部、大学院、附属学校の改革に関する有識者会議」での議論（文部科学省、2017bなど）にも注目が集まっており、このような変化の時代に、国立附属学校として社会にどのようなものを還元することができるのか、今まで以上に問われていると言える。

このような背景の中、本校では平成28年度より3ヶ年計画でコンピテンシー・ベースのカリキュラム開発に取り組んでいる。本論では、昨年度（平成28年度）の成果を踏まえ、本年度（平成29年度）の第16回公開教育研究大会（以下、公開研と表記）での取り組みをまとめると共に、今後の研究の方向性を示したいと思う。

2. これまでの研究成果の蓄積

2-1 本校における研究の背景

本校の教育を端的に示す語に「本物教育」がある。これは学校説明会などでも本校志願者とその保護者に対して語られると同時に、我々も教材開発の際に自らの授業を律する基準となっている。「本物教育」という語は、

単に知識内容を教えるような受験準備教育ではなく、教科の本質を学ぶ授業を行っているということを意図している。教科の本質を学ぶときに、生徒たちが教科内容(コンテンツ)を習得するに留まらず、コンピテンシーの伸長を目指していると考えている教員は多い。しかしながら現状として、コンピテンシーの変容をしっかりと評価している場面はそれほど多くない。また、それらは単一の教科・科目の中で閉じており、教科間で共有され、それが次の指導に活かされることはほとんどない。つまり本校の現状の課題として、①コンピテンシーの育成の重視とその評価方法の確立、②生徒のコンピテンシーの育成を目的に行なわれる教科横断的なカリキュラム・マネジメント、が挙げられるだろう。逆に言えば、この2点の視点を現状の「本物教育」の授業に加えることで、より高い次元の「本物教育」を目指すことができるということでもある。

また、本校が、コンピテンシー・ベースの教育に注目するに至ったきっかけの一つに、平成24年度より文部科学省指定事業スーパーサイエンスハイスクール(以下、SSHと表記)、平成26年度より同指定事業スーパーグローバルハイスクール・アソシエイト(以下、SGH-Aと表記)にて、教育カリキュラムの開発に取り組んだことがある。主にOECDのキー・コンピテンシー(詳細はライチェン&サルガニク(2006)など)を参照しながら、本校として育成すべきコンピテンシーを掲げ、その育成に焦点を当てた授業の開発に注力している。SSHに関しては、5年間の1期目(平成24~28年度)の取り組みが終わり、今年度より2期目(平成29~33年度)の取り組みが始まったところで、継続的にコンピテンシーの育成を目指したカリキュラムの構築に挑んでいるところである(本校SSH1期目の取り組みは、東京学芸大学附属高等学校(2017a)に詳しい)。

2-2 一昨年度(平成27年度)までの取り組み

資質・能力の育成に関する取り組みとしては、一昨年度(平成27年度)の第14回公開教育研究大会にて、「コンピテンシー・ベースの授業開発」と題し、ルーブリックをもとに評価を行なう授業を提案した(東京学芸大学附属高等学校(2015)に詳しい)。OECDのキー・コンピテンシーを育成すべき資質・能力に設定し、それを育成するための授業開発を行なった。また、SULE委員会(2015)など、資質・能力の育成に焦点を当てた実践も多く見られるようになり、その中で資質・能力の育成を目指す継続的な実践の重要性が示唆された。

また、本校はSSHの取り組みでも、それ以前の教科「情報」の設立でも、教科間連携型の授業を取り入れてきた。複数の教科・科目の観点から現象に迫り、生徒の多面的なものの見方・考え方を育てるためのものである。第12回公開教育研究大会でも扱われ、現在まで継続的に実践が行なわれている題材もある。今後、カリキュラム・マネジメントが成されれば、教科間連携授業の重要性はより高まると期待される(一昨年までの取り組みについては、東京学芸大学附属高等学校(2016)に詳しい)。

2-3 昨年度(平成28年度)の取り組み

第15回公開教育研究大会研究課題：

コンピテンシー・ベースのカリキュラム開発

ー「教科の本質」に根ざした授業実践とその評価ー

昨年度(平成28年度)の第15回公開教育研究大会は、上記をテーマに設定し、3ヶ年でのカリキュラム開発を開始した。1年目の目的としては、①コンピテンシー・ベースの授業開発の質を向上させること、②カリキュラム・マネジメントの第一歩として、教科カリキュラムの中に、コンピテンシー・ベースの発想をより根付かせること、の2点を挙げた。また、本校で育成すべき資質・能力として、以下のように「5つの重点課題」を設定し、それら能力を高める授業・カリキュラムを構築した。そのために、資質・能力の育成を評価するためのパフォーマンス課題とルーブリックの作成を各教科の授業で試みた。加えて、京都大学大学院教育学研究科准教授の西岡加名恵先生をお招きし、『「資質・能力」を育成するカリキュラム設計～パフォーマンス評価の考え方と進め方～』というテーマで講演して頂いた。

本校で設定した「5つの重点課題」：

- A 課題を発見する力
- B 科学的なプロセスで問題解決する力
- C 発信する力
- D 展望・計画をもつ力
- E 関係を構築する力、協働する力

第15回公開教育研究大会後には、それぞれの授業でどのようにパフォーマンス課題を設定し、それをどのように実際に評価したのかを、研究部(2016)としてまとめた。その中で以下の3点のような課題が得られ、これらは今年度の取り組みに繋がっている。

i) “本質的な問い” の設定

西岡先生の講演の中でも示唆頂いたが、教科のカリキュラム全体を通して、授業者が生徒にどのような問いを投げかけているのか、つまり“本質的な問い”は何だったのか、を再度考え直す必要がある。また、その問いを生徒が考えられるようなカリキュラムや単元を逆向きに設計していく努力が必要であると言える。また、“本質的な問い”の設定に当たっては、教科・科目での目標（教科の本質）や本校の生徒の現状を鑑みて、設定することが重要である。

ii) パフォーマンス課題の設定・充実

“本質的な問い”を各単元に落とし込んでいくために、具体的にはどのような課題を設定していけばよいのか、検討していかなければならない。また、併せてルーブリックなどを利用しながら、生徒の変容を数値化するなど、教員と生徒と共有できるような評価になるよう、充実させていく必要があるだろう。

iii) ゴールイメージの共有

カリキュラムの逆向き設計を実現させていくためには、“本質的な問い”に対応されるゴールイメージが不可欠である。教科においては“教科の本質”や“教科・科目の目標”という語に置き換えられる。しかし、本校

の教育課程全体においては“教育目標”や“本校で育成したい生徒像”という語に換言できるが、教科の目標よりも抽象的であり、教員間でのイメージの共有が難しい。また、本校の教育の方針を示す語として、“本物教育”という語をよく使用してきたのだが、世代交代とともにこの語の指すイメージが共有できなくなってきたという背景もある。そこで、“本物教育”や“本校で育成したい生徒像”を共有する機会を設け、各授業者・各教科が共通する言語やイメージを少しでも持ちながらカリキュラム開発に臨むことが重要と言える。

3. 今年度（平成 29 年度）の研究

(1) 今年度の研究の方向性（図 1 参照）

まず、始めに取り組んだのが、教員間での共通言語を少しでも増やすことである。本校は教育方針として3つの人間像（◆清純な、気品の高い人間、◆大樹のように大きく伸びる自主的な人間、◆世界性のゆたかな人間）が描かれている。ただし、これらは崇高な人間像であり、日頃の教育活動では実感しにくい面もある。そこで、もう少し具体的で分かりやすい目標として、以下のように「3つの生徒像（◆実直に向き合う生徒、◆自主的に学ぶ生徒、◆他と繋がる生徒）」を設定し、それらを支える基礎的な資質・能力として、「5つの重点課題」を継続的に用いた。

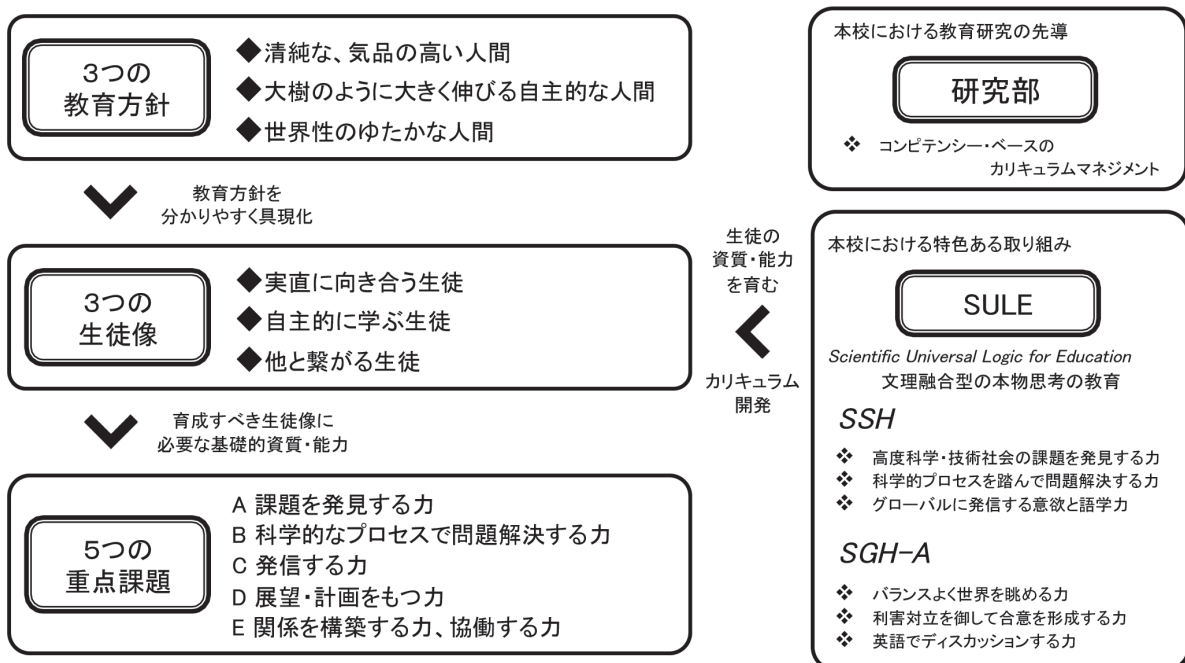


図 1 教育研究の方向性（ゴールイメージの整理）

※ SULE (Scientific Universal Logic for Education)：あらゆる教科で科学の方法を生かした授業を展開し、科学的判断力に裏打ちされた行動ができる生徒を育てる教育。SULE という語は本校のつくった語である。

(2) 本研究大会の方向性 (図2参照)

第16回公開教育研究大会研究課題：

コンピテンシー・ベースのカリキュラム開発(2)

ー「本質的な問い」とパフォーマンス評価の充実ー

昨年度の成果や課題を踏まえ、本研究大会では上記のように研究課題を設定した。これは、i) 各教科でのコンピテンシー・ベースのカリキュラム開発に向けて、パフォーマンス評価の質を向上させること、パフォーマンス評価の場をより多く設けること(教員がトライする機会を設けること)、ii) 各教科でのカリキュラムで「本質的な問い」を立てることにより、逆向き設計の思想を取り入れ、さらなる授業の改善に繋げること、を目的としている。基本的には、昨年度の第15回からテーマを継続的に取り組むことで、パフォーマンス評価の実践を蓄積させたいと考えている。

本研究大会後には、実践の蓄積から、コンピテンシーの育成を目指した各教科・科目のカリキュラムづくりを

実践する。評価のための評価、研究のための研究に終らせることなく、生徒の資質・能力を育成させ、その変容を評価し、その結果を生徒と共に共有するような授業の構築に繋げていきたいと考える。

以降、本年度公開研当日の公開授業一覧と共に、各公開授業における評価の部分を中心に、授業ごとのまとめを記す。なお、授業の詳細については、東京学芸大学附属高等学校(2017b)を参照すること。

研究の方向性 - 今回の目標 -

- ❖ 平成28年度 第15回 「コンピテンシー・ベースのカリキュラム開発
ー「教科の本質」に根ざした授業実践とその評価ー」
- ❖ 平成29年度 第16回 「コンピテンシー・ベースのカリキュラム開発(2)
ー「本質的な問い」とパフォーマンス評価の充実ー」

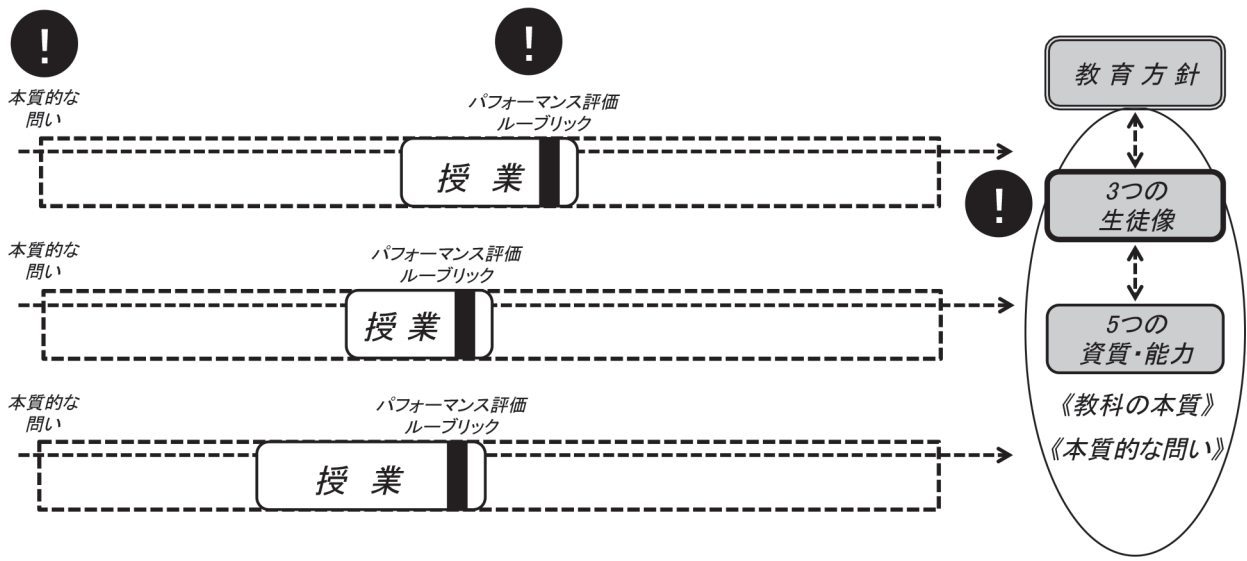


図2 本研究大会の方向性の概念図

- ①「本質的な問い」の導入, ②パフォーマンス評価の充実, ③ゴールイメージの共有



東京学芸大学附属高等学校第16回 公開教育研究大会

1. 主題

コンピテンシー・ベースのカリキュラム開発② - 「本質的な問い」とパフォーマンス評価の充実 -

現在、次期学習指導要領の改訂に向けて、様々な議論が成されています。特に資質・能力の育成という観点から、高大接続改革も巻き込みながら、教育界だけでなく、多くの注目を集めています。「アクティブ・ラーニング」や「カリキュラム・マネジメント」などの語は教育改革の象徴として、マスコミなどでもよく取り上げられているのを目にします。

さて、本校では「本物教育」というテーマのもと、本来より「教科の本質」に根ざした教育を実践して参りました。加えて、昨年度の第15回大会では、パフォーマンス評価を軸に置き、資質・能力の変容を評価する授業を提案致しました。それを受けて、今年でも資質・能力の育成の観点から、パフォーマンス評価を充実させていくことを目標としました。5つの資質・能力を重点課題として設定し、それらの育成を促進するため、の教科ごとのカリキュラムを構築しました。今後、それぞれの教科のカリキュラムをベースに学校全体のカリキュラム・マネジメントが成され、より充実した本校のカリキュラムの構築を目指していきます。

2. 日時・内容

平成29年6月24日(土)

9:00	9:30~9:50	10:00	10:50	11:05	11:55	12:45	14:15	14:30	16:00
受付	全体会	休憩	公開授業 I	休憩	公開授業 II	昼休み	研究協議会	休憩	シンポジウム

公開授業 I

教科	科目	授業者	授業タイトル	授 業 概 要
公民	現代社会	楊田龍明	2030年の社会にどのように関わり、より良い人生を送るのか? ~主体的、対話的な深い学びのプロセスと社会起業家マインドの育成~	「2030年の社会にどのように関わり、より良い人生を送るのか」を本質的な問いとして掲げた。主体的、対話的な深い学びのプロセスと社会起業家マインドの育成に発想し、課題を解決する力を養った。
数学	数学 B	佐藤充大	科学的なプロセスで問題解決する力を育てる授業 - 数列を題材として -	数列の漸化式を題材に、数学的プロセス「目的に応じた式変形」の質を高めることを意図した授業を行う。また、その質が高まったかどうかをみるパフォーマンス評価を提案する。
理科	地学基礎	田中巖洋	岩石が語っている言葉を知ろう!	岩石をただ観察しても、本校の目指すキー・コンピテンシーは育成できない。そこで、コンピテンシー・ベースの授業設計を変えていくと、どのような授業になるのか、授業者自身も模索しながら、当日の授業を迎えたい。
理科	化学	坂井英夫	科学的な手法で考える「マンガン干電池の製作と評価」	15分程度で製作できるマンガン干電池を制作し、その電池の性能をモーターで動く車で評価します。優れた性能を持つ電池を制作するために、どのような工夫をすればよいのかを考察し、その成果を発表します。
保健体育	体育	栗原鏡成	女子サッカー(フットサル)ゲームの工夫と評価	初心者の多い女子生徒が自分たちの技能に応じたゲームを進行し、戦術を工夫する。その活動を、ループリックにより、パフォーマンス評価を行う。
芸術 II	工芸	神田春菜	国際交流のつたち ~想いを伝える風品製作り~	工芸の社会的な働きや、機能と美しさの調和のとれた表現による社会をよりよく改善する工夫について考えることをめざし、「本校と関わり深いアジア諸国」に感謝や友好など思いや願いを込めて送る風品製作をする」という課題に取り組む。
芸術 II	音楽	居城勝彦	自分の音楽史を語る・奏でる	これまでの自分と音楽との関わりを見つめ直し、学校という場で音楽をしてきた趣味、演奏し、鑑賞することに取り組む。
芸術 II	書道	荒井一浩	古代文字の魅力を探る	篆書の文字構造や書史上の位置付けを調製し、文字が果たした目的や用具・用材、文字の変遷との関連を考える。そして、毛筆という表現性豊かな用具を用いて古代文字の魅力に触れ、現代の通行書体にはない造形美を体験する。
外国語 II	英語表現	光田伸太郎	グループワーク 表現活動 ~留学生を交えたディスカッション~	複数の外国人留学生が人数のグループになり、生徒と与えられたトピックについて英語を用いて話し合う。グループワークの形態を示すとともに、高校における表現活動の在り方を探る。

公開授業 II

教科	科目	授業者	授業タイトル	授 業 概 要
国語	古典 B	浅田孝紀	記述的文学に見られる言葉の重みを読み取る ~「兼和の風貌」(『方丈記』)における「あさまし」の含意~	軍記物語・隨筆等の記述性強い作品では、作者(語り手)の思いを体感できる箇所が多い。今回は『方丈記』の「兼和の風貌」を題材とし、作者の気持に基づく記述の文脈における「言葉の重み」を考えさせたい。
地理歴史	地理 B	栗山絵理	EUのその向こう ~統計が変わっても世界をとらえる目を養う~	「地理探究(仮)」を見逃さず、静態地理的方法で獲得した知識や考え方を活用し、動態地理的な思考の形成を促すことに挑戦したい。社会経済的な観点からヨーロッパの諸地域に焦点をあてた地理学習を目指す。
数学 I	数学	菅原幹雄	課題を克服する力を育てる授業 ~二次関数を題材として~	Geogebraを用いることで、グラフの位置関係と傾斜との関係系を作業を通して見出していくことを目指す。そのよりの授業期間を通じて、課題を見える力を育成することを狙う。また、そのパフォーマンス評価を合わせて提案する。
家庭基礎	家庭基礎	阿部留子	エプロン製作を通して消費者の視点で考えよう	本授業はエプロン製作の終盤の時期に当たる。1人で作ることに意義を、製作したからこそ理解が深まる知識や価値について話し合い、消費生活や環境に配慮したライフスタイルを提案させたい。

※理科(化学)、保健体育(体育)、外国語(英語表現 II)の授業は公開授業 I より2 時間連続で実施

研究協議会

教科	研究テーマ	提案者	助言講師	所 属
国語	語り手の思いを協同で読み解く授業	浅田孝紀	渡辺真裕	東京学芸大学 教職大学院 教育実践創造講座 准教授
地理歴史	これからの地理学習のあり方 ~ヨーロッパを題材に~	栗山絵理	加賀美雅弘	東京学芸大学 人文社会科学系 地理学分野 教授
公民	新科目「公共」と社会起業家マインドの育成	楊田龍明	渡部竜也	東京学芸大学 人文社会科学系 社会科学教育分野 准教授
数学	資質・能力を育てる数学の授業とパフォーマンス評価	数学科	熊倉啓之	静岡大学 学部院教育学領域 教授
理科	理科におけるパフォーマンス評価の実践	理科	宮内卓也	東京学芸大学 教育実践研究支援センター 教育実践指導員 准教授
芸術(工芸)	「A表現」と「B鑑賞」相互の関連の中で思考力・判断力・表現力を育てる指導方法と学習評価の工夫について	神田春菜	澤口隆	東洋大学 経済学部 教授
芸術(音楽)	高校生にとって自分の音楽史を語る・奏でることの意義とは何か	居城勝彦	東良雅人	文部科学省 初等中等教育局 教育課程課 教科調査官
芸術(書道)	育成すべき資質・能力を明確にした書道授業	荒井一浩	加藤泰弘	東京学芸大学 芸術・スポーツ・科学系 音楽科教育学分野 教授
家庭科	家庭基礎で考える消費生活と生活体験	阿部留子	鳴海多恵子	文部科学省 初等中等教育局 教育課程課 教科調査官
保健体育	体育における真正の問いと評価	栗原鏡成	渡辺雅之	東京学芸大学 生活科学系 名著教授
外国語(英語)	高校における表現・発表活動	光田伸太郎	金谷馨	東京学芸大学 芸術・スポーツ・科学系 健康科学分野 教授

シンポジウム

探究活動を通して「パフォーマンス評価の充実」を考える
発表者 仲史雄 先生 (大阪教育大学科学教育センター准教授)

協力校 お茶の水女子大学附属高専学校・東京都立戸山高等学校・横浜アイエンスフロンティア高等学校 (ほか)

次期学習指導要領改訂で注目される探究的な学び、SSH や SSI や SSIH などの活動にて探究活動を熱心に取り組んでおられる上記の高校の先生方をお招きし、探究的な学びの可能性について議論を深める。また、探究活動や授業におけるパフォーマンス評価の重要性について考える。

公開研 公開授業Ⅰ

公民科（現代社会）「TOKYO2020 を機に、社会を変えるには!？」

授業者 楊田 龍明

1. 「本質的な問い」の設定

「2030年の社会にどのように関わり、より良い人生を送るのか?」。本校公民科が掲げた本質的な問いである。「学びに向かう力・人間性の涵養」を示した次期学習指導要領を踏まえたものである。また2022年から主権者意識を育む必修科目「公共」が新設される。「公共」の目的には「自立した主体として社会に参画し、他者と協働することの意義について考えさせる」ことが含まれている。本実践は、市民社会の構成員として社会をより良くしたいという意欲・気持ち（社会起業家マインド）を育てることを目的としたものである。

公開授業では東京パラリンピックで行われるシッティングバレーボールの体験を踏まえて、キャッチコピーを考えさせる取り組みを行った。座るだけで参加できるこの競技は教材として最適だと感じた。2020年東京大会を機に「世界に誇るバリアフリー先進都市」が目指されている。現在、日本国内に障がい者は700万人超、高齢者は3000万人超とされる。移動に多少の困難を感じる人は全人口の3割を超えている。移動の不安を払拭し障壁のないコンパクトな街づくりが求められている。2020年以降の社会の姿を考えることで「D.展望・計画する力」を、またキャッチコピー考案で「C.発信する力」の伸長を目指した。障がい者と健常者が共に課題に向き合うことの難しさを突き詰めつつ、「主体的・対話的な深い学びのプロセス」の中で、本校が掲げる「実直に向き合う生徒（清純で気品の高い人間）」を育成したいと考えた。

2. 評価方法 ～パフォーマンス課題の設定～

生徒の意見やイラストなどを掲載した本校公民科通信『ガクツキ』第4号「体が動かないよりも心が動かない方が不安だ」を本単元の導入で用いた。ここに掲載した作品および、授業の中で考案したシッティングバレーボールのキャッチコピーをパフォーマンス課題とした。定期テストにおいて、授業を踏まえた和訳問題を出題した。

3. (1) 単元計画

1時間目	『ガクツキ』第4号 シッティングバレーボール動画鑑賞 戦後日本の復興1964年オリンピック
2時間目	やってみようシッティングバレーボール体験 体育館
3時間目	グループ別話し合い「シッティングバレーボールの普及と影響について」
4時間目（本時）	TOKYO2020を機に、社会を変えるには!? シッティングバレーボールのキャッチコピー考案と相互評価
5時間目	高度成長・バブル経済・失われた20年

(2) 単元の目標

「過去を知り、現在を見つめれば、未来の姿がわかる」。戦後日本経済の変遷を学び、これからを考える。シッティングバレーボールを体験し、障がい者と健常者が互いの違いを強みに変えるインクルーシブな社会を実現するにはどうしたらいいのか、を考えさせたい。超少子高齢社会の到来など不安を示すだけで終わらせず、未来をどうにかしたいと格闘する「社会起業家」マインドを育てたい。

4. 評価の実際 ～単元における生徒の変容と今後の課題～

率直に述べる。私自身が体育館でジャージを着て汗だくで現代社会の授業を行うことは想定外だった。当初は競技団体等による体験授業を模索していた。様々に依頼したが、多忙を極めており断られた。保健体育科の先生等にも相談する中でスポーツは大変苦手な私であるが最終的に生徒と一緒にやってみるしかないと思った。不安を飛び越えて一緒にやってみると楽しかった。生徒へ投げかける問いに重みが増したように感じた。



授業 シッティングバレーボールを体験

生徒たちは「経験や練習の差はあっても、あまり区別なしに誰もが楽しめるように感じた」「器具を使うことなく簡単に参加できる魅力的なスポーツだと感じた」「方向転換しづらかったけれど、楽しかった」「健常者はお尻を床から離さないように気を配るもどかしさがある」といった意見とともに「上半身に障害を持つ人は参加できない。この競技は誰もが参加できるわけではない」という感想もあった。

本実践では主体的・対話的な深い学びにおけるプロセスを重視した。話し合いの結論ではなく、さまざまな意見を聞く中での驚き、気づきに各人の学びがあると考えた。クレイゴトでは社会は変わらないと生徒たちに本音の意見を促した。シッティングバレーボールが社会に普及したら、これからの社会はどんな風になるだろうか?との話し合いでは、「障がいを持つ人について考えるきっかけになる」「パラリンピックへの理解が深まる」との意見の一方で、「認知は広がっても意識が変わることはない」「健常者がすすんでやるとは思わない」とのシビアな意見もあった。また、この競技の普及が難しい理由は何にあるのか?との問いでは「そもそも同じ場にはいないから」「障がい者に対するチャリティーの要素が強いから」などの意見があがった。「社会はなにも変わらないと思う」と挙手した生徒たちに「では、学校教育でシッティングバレーボールを取り上げなくても良いか?」と聞いた。「体験してみても面白かった。座学では学べないこともあった」と困った表情で答えた生徒が印象に残っている。

このような話し合いをふまえ、一人一人が宿題で考案してきたキャッチコピーをグループごとに相互評価させた。「その表現は当事者に失礼だ」「もっとインパクトがないと俺は関心を持たない」「それ実感に近い」など対話的な学びのプロセスが聞こえてきた。「バリアをネットに!!」とのキャッチコピーを発表した生徒は次のように述べた。「自分は障がい者について理解していない。そもそも理解できるとも思えない。けれども、どうせ分からないと壁をつくるのではなく、障がい者に対して感じる距離やバリアを壁ではなくネットにしたい。相手のこともこちらのことも互いに見えるようにしたい」。ネットを挟んで向かい合う競技でお互いの違いが見える関係にしたいとの彼の思いによって教室は拍手で包まれた。

表に示したようなキャッチコピーを表現力や本音に迫る力などの観点で評価した。さらに定期テストでは、【授業をふまえて「Don't be silly!!」を和訳しなさい】との出題も行った。「恥ずかしがらず、尻込みせずにやってみよう!!」「尻は上げるな!!気持ちは上げろ!!」「障がい者とシリアいになりたくない』『障がい者スポーツなんてシリません』だって!?バカなことを言ってんじゃないよ!!」などの解答がみられた。これらの優れた作品を集約したプリントを配布することで、ある程度の評価基準や説得力を示したつもりである。

僥倖にも公開授業後に日本パラリンピックサポートセンターを訪問する好機に巡り合った。健常者だけで話し合う授業の危うさを不安に思う私に、パラリンピアンの方は「当事者がいないからこそ、生徒の皆さんは萎縮せずに本音で考えることができたのかもしれない」との感想を聞かせてくれた。当事者の生の声を聞き一緒に体験できれば一番いい。しかし競技者は少なく、仕事や練習もある中で全てのリクエストに応えることは困難である。当事者がいなければ体験できないと尻込みしては、いつまでも社会は変わらないと感じる。

簡単に参加できる利点は大きい。しかし座ってバレーボールを健常者だけで行うことはゲーム体験にすぎない。ある生徒は「私の弟は足に生まれつきの障がいがありますが、この競技を勧めるのはうまく言えませんが、ものすごくあからさまな感じがしてできません。私自身シッティングバレーボールに触れて良いものだった気持ちに嘘は無いのですが、これが健常者だけで考えているということなのかなと思いました」と感想を寄せてくれた。障がい者のいない中で、当事者の気持ちを勝手に考えることに疑問を感じた生徒は他にもいた。こうした疑問は自らの健常意識を問い直し、視野の外にありがちな障がい者の存在に気づき、他者と自己との違いを強みに変えるインクルーシブな社会を築きたいとの気持ちの萌芽と前向きに捉えることもできる。一方で障がい者がいない場で本音をさらけ出すことは差別と紙一重に感じる向きもあるだろう。なんらかの障がいを持つ人は社会の5%とされる。障がい者が身近な生徒も多数いる。にも関わらず、当事者やその家族について考え語られる機会は少ないのが現実である。この点で私は、教師自身が自己と向き合い、率直に語る大切だと考えている。96歳の私の祖母は介助なしに歩くことはできない。祖母の入浴介助を母と二人で汗だくで行った体験などを有りの俣に語った。また健常者だけで何が学べるのかを保健体育の先生と話し合ったことも口にした。これが無関心や冷笑主義を打ち破り「人々が自らを能動的な市民とみなすこと」につながると感じている。

本実践の改善点として、1.社会起業家マインド育成の不明瞭さ。2.視覚障がい者が行うゴールボールなど他の教材との比較。3.キャッチコピーを評価するループリックの再考などがある。「2030年の社会にどのように関わり、より良い人生を送るのか」と自分自身に問いながら、インクルーシブな社会を築くシチズンシップ教育実践を深化させていきたい。

楽しそうでしょ!?嫉妬 sit しない!?
This is 座バレー。座ればわかる!!
バリアをネットに!!
腰が浮くほどの面白さ!!
その座高を活かそう!!
尻を浮かせず、心ウキウキ!!
もう気をつかうのやめた!!

表 生徒の考案したキャッチコピー

公開研 公開授業 I

理科（地学基礎）「岩石が語っている言葉を聴こう！」

授業者 田中 義洋

1. 「本質的な問い」の設定

地学基礎の中で、この単元では岩石を観察し、その岩石の成因を考察し、それらをまとめていくことを目指している。岩石を観察していく過程で、「A 課題を発見する力」を育成し、その観察事実から成因を考察していく過程で、「B 科学的なプロセスで問題解決する力」を育成し、さらには、観察事実や考察内容を文章にまとめたり、発表したりする過程で、「C 発信する力」を育成しようとしている。

なお、岩石を観察し、点描でスケッチすることは、理科（地学）における基本的な知識・技能の1つとして育成しようとしている。

今回、「岩石がどのようにしてできたのか？」を本質的な問いとして、火成岩の成因について考えさせてみた。まず、観察をして、何に着目をすべきかを生徒に考えさせながら、自分たちで考察し、まとめさせていくことにした。

2. 評価方法 ～ パフォーマンス課題の設定 ～

「A 課題を発見する力」と「B 科学的なプロセスで問題解決する力」を評価するために、まず、岩石の観察を通してその岩石がどのようにしてできたか（成因）を考えさせるパフォーマンス課題を設定した。今回の授業では、授業時間内でできる範囲で課題にグループで取り組み、現時点での観察事実や考察内容を発表してもらうことで、「C 発信する力」を評価する。

最終的には、火成岩を偏光顕微鏡で観察し、観察した火成岩のスケッチとともに、生徒一人一人にレポートにまとめさせ、スケッチの技能を含め、本単元で育てたい3つの資質・能力を評価する。

3. 単元計画

この単元では、鉱物と岩石について、6時間の授業を行う。そのうち、2時間は鉱物、4時間は岩石の内容である。

1 時間目	鉱物と岩石の関係を考えるために、偏光板を直交ニコルにすると暗黒になるのに、間に方解石をはさむと明るく見える理由を考えさせ、レポートにまとめさせた。
2 時間目	黒雲母の劈開など、鉱物の性質をいくつか観察した上で、鉱物の持つ条件を考えさせた。
3 時間目 〔本時〕	火成岩の肉眼観察により成因を考えさせ、ワークシートにまとめさせた。
4 時間目	火成岩について、その分類や結晶分化作用について説明した。
5 時間目	火成岩の偏光顕微鏡による観察を行った。
6 時間目	5 回目の観察を踏まえて、成因を考えさせた。

4. 評価の実際 ～ 単元における生徒の変容と今後の課題 ～

ここでは、紙面の都合もあるため、公開授業でのパフォーマンス評価について示しておく。

- ① 妙高山のデーサイトの標本1と、玄武岩にかんらん岩が捕獲された標本2を観察させ、岩石の種類を答えさせたところ、以下のような結果となった。標本1、2とも火成岩である。

妙高山のデーサイトの標本1

	火成岩	堆積岩	変成岩
男子	18人	1人	0人
女子	16人	1人	0人
合計	34人	2人	0人

玄武岩にかんらん岩が捕獲された標本2

	火成岩	堆積岩	変成岩
男子	16人	0人	3人
女子	13人	0人	4人
合計	29人	0人	7人

標本1については94%の生徒が、標本2については81%の生徒が火成岩であると答えている。本時以前に学習した鉱物の授業内容が生かされているように感じた。

② 火成岩と答えた生徒について、以下のルーブリックに基づき、評価をしてみた。

	4	3	2	1
A 課題を発見する力	岩石を根拠を持って観察できることに加え、その成因を正しく考察することができる。	岩石を根拠を持って観察できることに加え、その成因を考察することができる。	岩石を根拠を持って観察することができる。	岩石を表面的に観察することができる。
B 科学的なプロセスで問題解決する力 (標本1について)	鉱物や組織のようすから火山岩であることに気づき、その産状にまで気づくことができる。	鉱物や組織のようすから火山岩であることに気づくことができる。	鉱物のようすから火成岩であることに気づくことができる。	火成岩であることは気づいたが、根拠が曖昧である。
B 科学的なプロセスで問題解決する力 (標本2について)	鉱物や組織のようすから2つの火成岩が異なる成因で形成されていることに気づき、その産状にまで気づくことができる。	鉱物や組織のようすから2つの火成岩が異なる成因で形成されていることに気づくことができる。	鉱物のようすから2つの火成岩からなることに気づくことができる。	火成岩であることは気づいたが、根拠が曖昧である。
C 発信する力	客観的な根拠を持つとともに、論理的に記録・発表することができる。	客観的な根拠を持って記録・発表することができる。	自分なりの根拠を持って記録・発表することができる。	根拠が不明確で、論理に飛躍が見られる記録・発表である。

妙高山のデーサイトの標本1

A	4	3	2	1
男子	0人	0人	15人	3人
女子	0人	0人	16人	0人
合計	0人	0人	31人	3人

玄武岩にかんらん岩が捕獲された標本2

A	4	3	2	1
男子	0人	0人	14人	2人
女子	0人	0人	13人	0人
合計	0人	0人	27人	2人

B	4	3	2	1
男子	0人	16人	2人	0人
女子	0人	14人	2人	0人
合計	0人	30人	4人	0人

B	4	3	2	1
男子	0人	7人	9人	0人
女子	0人	4人	9人	0人
合計	0人	11人	18人	0人

C	4	3	2	1
男子	0人	1人	17人	0人
女子	0人	2人	14人	0人
合計	0人	3人	31人	0人

C	4	3	2	1
男子	0人	2人	14人	0人
女子	0人	0人	13人	0人
合計	0人	2人	27人	0人

標本1については、火成岩と考えた生徒のうち、88%が火山岩であると答えている。その根拠として、斑状組織を示していること、表面に孔が空いていることなどをあげている。ただ、その根拠を客観的に示すことができたのは、8%の生徒に過ぎなかった。

標本2については、火成岩と考えた生徒のうち、38%が2つの異なる火成岩で形成されていると答えている。その根拠として、組織や含有鉱物の違いをあげている。ただ、その根拠を客観的に示すことができたのは、7%の生徒に過ぎなかった。

以上のように、パフォーマンス評価を授業者が行ったが、この展開では生徒の変容を見ることはできない。授業前の生徒の状況をいかに把握し、生徒の変容を見ていくかが大いなる課題である。そのためには、単元計画の見直しも必要であると考えている。

公開研 公開研究Ⅰ・Ⅱ

保健体育（体育）「女子サッカー（フットサル）ゲームの工夫と評価」

授業者 栗原 鏡成

1. 「本質的な問い」の設定

他教科と違い、体育実技の場合は、そのパフォーマンスがすぐに表出し、他人の目にさらされると同時に評価を得ることとなる。そこでは得意な生徒が自信を持ち、苦手な生徒が消極的な活動に陥りやすい。しかし、今回は初心者が多いと思われる女子フットサルを取り上げ、技術・戦術（フォーメーションを含む）を駆使し、勝敗にこだわりすぎることなく、全員が安全に楽しめる活動を目指した。

フットサルは、2チームが互いにボールを奪い合い、相手のゴールにボールを蹴り込み得点を争うといったゴール型のスポーツである。他の競技では、ボールを手で扱うことが許されており、比較的容易に顔を上げて状況を判断することができるが、足元にボールを置くサッカーは、顔が下を向くことで、なかなか状況判断をしづらい、従ってサポートをする味方が両手を広げた位置でサポートし、声をかけて呼ぶことでパスコースを作れるようにしていくことを狙わせる。

また、ゲームにおいては特定の力のある生徒のドリブルやシュートが目立ち、力の弱い生徒が怖がることのないように、ゴールの形やコートのおよび人数を自分たちの技術に応じて変化させるよう話し合い、その中で解決させていく。その際に得意な生徒がリーダーシップを持って発言することが多いが、苦手な生徒の意見を引き出せるように働きかける。

これらの話し合いの中で、本校の重点課題の中でも、特に実技教科で伸長できると考えられる、「E. 関係を構築する力、協働する力」を育てたい。それは、

- ① 言葉や言葉以外により、いい関係を作る能力。
- ② プレーやプレー以外の場面で、仲間と協力してチームで働く能力。
- ③ 個人やチームの課題を把握し、問題を解決する能力。

といったところである。

2. 評価方法 ～ パフォーマンス課題の設定 ～

実技教科であることから、「パフォーマンス評価」についてはスキルテストを行い、それを参考にチーム編成を行った。また最後に同じスキルテストを行うことで伸び率を量った。（ペナルティエリアの外側を周りゴール前で5つのコーン間をジグザグドリブルしてシュートが決まる時間：ペナルティとしてコーン1つ飛ばすごとに5秒加算、シュート外しは10秒加算）

また、チームのメンバーに対して、「上達度」「意欲」「協力性」「マナー」「技術レベル」「指導力」などの観点を相互評価する。さらに、目指すべく関係を構築していく力を「ルーブリック」により示し評価を行った。

3. 単元計画

- ・ボールを足で操作することに慣れ、パスやドリブルなどの使い分けを確認しながら、ゲームを楽しむことができる。
- ・ゲームを自分たちの技術、技能に応じて変化させ、全員が興味を持ち楽しむことができる。（ゴールの形、コートのおよび人数等）
- ・ゲームの特性を理解し、チームで行う練習を通して、技術や戦術の向上を目指す。
- ・上記を進めるにあたり、能力の高い生徒が一方向的に進めるのではなく、苦手と思われる生徒の発言を引き出せるようにする。

- a. キックとは足で蹴るだけでなく、体重をボールにぶつける。立ち足の重要性。
- b. インサイドキックの正しい蹴り方とそれを利用したフェイント。
- c. アウトサイドキックの有効性。(フェイント)
- d. ドリブルのリズムと立ち足の重要性。
- e. ファーストタッチ (ウェッジコントロールとクッションコントロール)
- f. 攻撃時のサポートのポイント (両手を軽く広げた位置に開く)
- g. ボールを持っていない味方がサポートの声を出す。
- h. ディフェンスはボール (相手) とゴールの間にポジションを取る。
- i. 判断のないDFのクリアは相手の選手に危険を及ぼすことがある。(顔面等強打)
- j. サイド攻撃をしようとした時にタッチラインを割る回数が多い場合狭く、ほとんど出ない場合広い。
- k. 全員がゴール前に戻ってDFできるようではコート of の長さが短い。
- l. 試合時間の中で両チーム点が入らない場合ゴールが小さい。

時間	ねらい	内容
1～6	<ul style="list-style-type: none"> ○オリエンテーションスキルテストでのチーム分け。 ○基本技術を身につける。 キック, ドリブル, 体の向き, ディフェンス, ファーストタッチ 	<ul style="list-style-type: none"> ○学習の進め方 ○スキルテスト ○試しのゲーム ○インサイドキック (パスアンドゴー) ab ○ドリブル (コーンドリブル) cd ○ワンタッチパス (声かけ) bg ○3 vs 1 鳥かご bcefg ○いろいろなゴールでのゲーム hi (ダブルゴール, ベンチ, コーンバー等) jl
7～14	<ul style="list-style-type: none"> ○サイド攻撃の有効性 ○サイドチェンジの方法 ○ポストの使い方 ○ゲームの理解と変化のさせ方の理解 	<ul style="list-style-type: none"> ○クロス～シュート ○サイドからMFを使ってサイドチェンジ ○ポストプレーからサイドチェンジ ○人数を変化させてのゲーム (5～7人) ○コート of の大きさを変化させてのゲーム jkl
15～18	<ul style="list-style-type: none"> ○ゲームの決定 ○ゲームに応じた作戦と練習 	<ul style="list-style-type: none"> ○ゲーム, 反省, 練習, ゲーム

4. 評価の実際 ～ 単元における生徒の変容と今後の課題 ～

「パフォーマンス評価」

29.44秒から22.89秒に短縮した。120名中102名が向上した, 下がった13名の内, 数名を除き初めのタイムが良く, 誤差の範囲と思われる。

「相互評価」

30点満点で平均23.43点であり, 指導力の項目についてはやはり3点に近く, それ以外はほぼ4点以上となっている。意欲的に, 協力して技術をマスターして活動していたことが伺える。

「ルーブリック評価」

前回2年生男子サッカーで行ったものを, 4回目の授業で生徒と項目のすり合わせをした。最初の項目合計は平均8点であったが, 最終的に8.86点まで向上した。特に③の問題を解決する力の項目が6割の生徒で上がった。これは自分達に合ったゲームのルール作りにおいて, 様々な意見を出し合いお互いを認めていく中で向上したものと思われる。

公開研 公開授業Ⅰ

芸術科（工芸）「国際交流のかたち～想いを伝える風呂敷作り～」

授業者 神田 春菜

1. 「本質的な問い」の設定

工芸の2年間のカリキュラムを通して育みたい人間像を踏まえ、「心豊かな生き方を創造するにはどのような工夫をすればいいだろうか?」という本質的な問いを立てている。工芸を通して生涯に渡り心豊かな生き方を創造していくよう、形や色、素材やイメージなどの造形的な視点から、身の回りの生活環境や社会をよりよく改善する工夫や、自己と工芸の関わりについて、工芸の表現の活動と鑑賞の活動から考えることを、授業の軸としている。それらの活動を通し、身の回りのものや生活環境、社会を多様な視点から捉え直し、新しい価値観を見出す力を身につけ、文化や伝統を継承し、未来を創造していける人間として成長していくことを目指している。

学習活動の軸となる「創造する」という行為は、様々な能力を複雑に働かせなければならず、本校の掲げる5つの資質・能力も働かせていると考える。それぞれの資質・能力と学習活動の関連性を整理し、各題材においては、重点的に高めたい資質・能力を2～3つ選択し、パフォーマンス課題を設定している。

本題材は「A 表現(2)社会と工芸」「B 鑑賞」の領域であるため、使い手や他者の視点から考える必要がある。よって「C 発信する力」と「E 関係を構築する力、協議する力」に重点を置いた。「C 発信する力」とは、「自己の価値観を明確にすること」と「イメージや形、色、素材などの造形的要素を効果的に用いて、自己の考えや思いを造形的に他者に伝えること」ができることで身につくと考える。また、「E 関係を構築する力、協議する力」は、「他の人や異文化に対する興味・関心を持ち、価値観の違いやよさについて理解を深めること」や「お互いが協力し合い、よりよいものを目指し作業に取り組むこと」を通して生まれていくことが期待される。

2. 評価方法 ～パフォーマンス課題の設定～

本題材は、前年度の反省を踏まえ「本校と関わりの深いアジア諸国（タイ、韓国、中国）に感謝や友好などの思いや願いを込めて送る風呂敷を制作する」というパフォーマンス課題として設定し、「C 発信する力」と「E 関係を構築する力、協議する力」を重点的に育成することを目指した。教科の特性を踏まえた課題とするため、5つの資質・能力を評価するにあたり、工芸の評価規準と関連づけて評価基準に取り入れた。「C 発信する力」は発想や構想の能力と関連づけ、自己の願いや心情から発想できているか、その発想をそれぞれの国の伝統や文化の表現のよさや風呂敷や型染め表現のよさを生かし、他者に伝わる形で構想できているかという視点で評価を行った。「E 関係を構築する力、協議する力」は、贈る国に興味や関心を持ち調べ、理解を深めることができているか、という点で評価を行った。また、工芸Ⅱは1回の授業時間が50分であるため、お互いに協力しなければ時間内に作業を終わらせることは不可能である。創造的な技能の観点から、協力し合い、時間の中で丁寧に作品を仕上げることができているかを評価した。

評価するパフォーマンスとしては、「成果物である作品」「デザインの発想段階から鑑賞に至るまでの授業の記録であるポートフォリオの記述」「題材のねらいを踏まえて授業に取り組む姿勢」の三点である。

3. 単元計画

本題材は、工芸の社会的な働きや、機能と美しさの調和のとれた表現から、社会をよりよく改善する工夫について考えることをねらいとし、型染めの技法を用い、各自が考えた文様を藍で染め、風呂敷を制作した。はじめに鑑賞の活動を通してそれぞれの国の歴史と文化である文様を通してその国について理解を深めるとともに、感謝や友好などの思いや願いが伝わるような文様のモチーフを発想し、型染めや藍染、包みの特徴を生かして構想した。そしてお互いに協力し合い染色を行った。最後に相互鑑賞会を行い、自分の意図を形にすることができたかを振り返り、国際社会における工芸の働きについて理解を深めた。授業は全12回で行った。

4. 評価の実際 ～単元における生徒の変容と今後の課題～

ここでは題材を通して変容が把握できた、「C 発信する力」についてまとめる。変容のあった生徒は全体の半分ほどであり、生徒の特徴として、課題の趣旨を理解し取り組んでいたこと、ポートフォリオや作品にかたちとして表れ

ていたことが挙げられる。どのように変容したかはそれぞれの生徒によって異なるため、ここでは2人の生徒を具体例として挙げたい。また一つの題材の中での変容では、資質・能力が身についたか判別がつかないため、1年次の取り組みの様子と、次の題材である「人々の生活を心豊かに創造する、パブリックスペースに設置する時計の提案」の取り組みの様子から考察する。

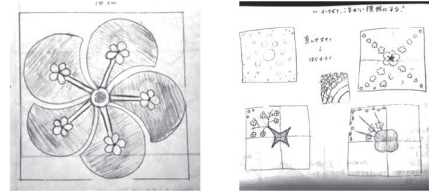
(「 」内は生徒のポートフォリオの記述より引用している)。

生徒Aは、1年次から題材のねらいを理解し、積極的に取り組む生徒であり、自分の中のイメージを表現できる生徒である。文様のモチーフとして不老長寿の象徴である梅を選んでいる。中国の梅の文様は「ほとんどの場合枝も一緒に描かれている」という気づきから、「日本の梅の文様の中に枝のついた梅をくみあわせること」で、両者の伝統的な表現を取り入れて構想している(資料1)。初めは、細かい模様で表現しようと試みていたが(資料2)、型染めや包むという表現状の特徴を生かし、文様をシンプルな形にまとめている。また、「文様が梅で五つの花びらがあるので、構図も梅の文様を用いて五つ並べ、一つの大きな梅にみえるよう」表現する(資料3)と共に、贈り物である飴入りの瓶を包んだ時に文様が美しく表れるよう配置を工夫している(資料4)。最後のまとめでは「工芸作品から、つくった人の性格などが読みとれるのは面白いと思った」「より自分の個性を生かしたい」と語っている。また、次の題材では、子どものいるスペースに設置する時計を提案している。文字盤をパズルにするという工夫を加え、子どもが遊びながら時計について学習できる要素を取り入れたものである。また、組み合わせのおもしろさや子どもが安全に楽しめるよう木材を選んでいる。まだ発想の段階ではあるものの、前課題で学習したことが生きており、伝えたいことを造形的に発信する力を高めることができたと思われる。

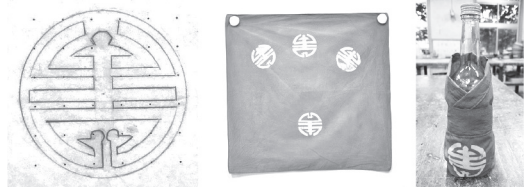
生徒Bは、1年次は使い手の視点から考える題材においても、自分が作りたいから作るという発想が色濃い生徒であった。文様のモチーフとしては中国が発祥である寿字文様(円寿)を選んでいる。「既存の伝統文様を基盤にしながらもちょっとした鶴や亀のような日本的要素を取り入れ」構成している(資料5)。また贈り物の瓶の包み方を踏まえ、文様を「折り目をつけた時に文様がきちんと見えるよう底部、重ね合わす部分それに最後に正面に来る部分を推測して配置し」たり、「文様の向き」や「文様と文様の互いの距離感」も工夫し、風呂敷のデザインを構想している(資料6,7)。学習を通してのまとめとして「工芸の一番大きな役割は伝統の継承と話題の創造」と語っている。自分の発信したいことを造形的にまとめる中で学んだということが、作品から伺える。次の題材では、図書館の読書スペースに設置する時計を提案している。静かなスペースに置くため、目立ちすぎない文字盤表現や素材の工夫を取り入れるなど、他者の視点に立ちながらも自己のこだわりを取り入れることができるようになってきていると考える。

一方、変容が見られなかった生徒も半数はおり、その生徒は、題材や芸術教科に対する興味・関心が低かったり、1年次からつくるのが目的となっていたりするものが多く、題材のねらいを理解して取り組む姿勢が見られなかった。その原因としては、題材の趣旨が伝わっていないことが大きいと考える。加えて、工芸はキレイなものをつくるというイメージが根強い。工芸に対するイメージを多様にする工夫がなければ、課題のねらいも伝わらないと感じた。また、本題材では染色の持つ素材のおもしろさから発想や構想をする場面が少なかったことも、生徒が題材に魅力を感じなかった原因の一つであると考えられる。素材を通してものをつくるおもしろさを忘れないよう、題材を設定したい。

評価の方法としてループリックを用いたが、今回用いたループリックで生徒の変容を適切に把握できたのか、ループリックがなくても従来通り個々の指導の記録だけでも把握できたのか、その効果の有無が判然とせず、協議会の中でも話題として取り上げた。示唆に富む助言を多くいただいたが、何に対するループリックなのかを共有すること、「本質的な問い」が生徒にも伝わるようにするためには、「題材名」を工夫することが大切であることが、特に課題であるとわかった。ループリックを作成することは、授業の改善に役立てることができていると授業者自身は感じている。一方で、生徒にとって意味があるものとなっているか、発想や構想を縛るものになっていないか、教師と生徒にとってよりよい学びにつながるよう今後も改善を重ねていく。



資料1 (左), 2 (右上) 生徒Aの
ポートフォリオのスケッチより
資料3 (左下), 4 (右下) 生徒A作品



資料5 (左) 生徒Bのポートフォリオのスケッチより
資料6 (中央), 7 (右) 生徒B作品

公開研 公開授業Ⅰ

芸術（音楽Ⅱ）「自分の音楽史を語る・奏でる」

授業者 居城 勝彦

1. 「本質的な問い」の設定

音楽Ⅱにおける諸活動を通して生徒たちに向き合ってもらいたい本質的な問いは、現在そしてこれからの自分の生活にとっての「音楽」について追究するということである。多くの生徒たちにとっては、学校生活11年間で最後の音楽の時間となるのが音楽Ⅱである。これまでの自分と音楽との関わりを振り返り、その意味を再認識して、これから先の生涯にわたる音楽とのつきあい方の指針を持つきっかけとしてほしい。

本単元で育てたい資質・能力は「C. 発信する力」及び「E. 関係を構築する力、協働する力」である。生徒にとっては、現在接している音楽やこれまで接してきた音楽の意味や価値を再認識し、これからの人生で音楽とどのように関わることなのかを考える活動である。自らの音楽経験を振り返り、トピックとして記述し仲間との共有を図る場面では、「C. 発信する力」が発揮される。この過程は、教師主導で生徒にとって未知の音楽文化と出会わせることと同じくらい重要な意味を持ち、十分な思考をも伴う表現活動になりうると考えている。また、学校音楽教育の重要な一側面である「音楽を介して人とつながること」に対して、自分なりの考えを持って取り組めるようになる場面では「E. 関係を構築する力、協働する力」が期待される。

2. 評価方法 ～ パフォーマンス課題の設定 ～

歌唱表現については、パフォーマンス評価として授業中の演奏への取り組みを評価した。その他の評価としては、活動中の発言やディスカッションへの取り組み方、「わたしの音楽史」のワークシート及び継続的に取り組んでいる音楽学習カードへの記述を評価の対象とした。いずれの記述も、現在接している音楽やこれまで接してきた音楽の意味や価値を再認識し、これからの人生で音楽とどのように関わることにつながることを重視した。音楽のジャンルや演奏形態、演奏の仕上がり具合を評価の対象とはせず、未知の音楽との出会いや自分と重なる仲間の音楽経験に関心を持ち、自分の音楽経験と重ね合わせどのような思考をしているかを評価の対象とした。

3. 単元計画

音楽Ⅰ（2単位）では、日・伊・独・英・羅の各言語の歌曲や合唱曲の演奏表現と楽曲の成立背景に迫る音楽史、サンバの合奏とブラジル理解、音階や調性に関する楽典について学習した。3学期には1年音楽選択者全員で「ハレルヤコーラス」（ヘンデル作曲）と「大地讃頌」をオーケストラ部の演奏で合唱し、卒業式・入学式で披露した。音楽Ⅱ（1単位）では、ゴスペル版の「ハレルヤコーラス」や古典派・ロマン派のドイツリートを演奏に取り組んでいる。

生徒たちにとっての音楽の時間は、週1回の存分に表現活動に浸れる時間である。その価値は十分に理解した上で、授業の連続性を長期的にとらえた場合の価値について生徒たちに気づいてもらいたいと考えている。

本単元は、表現だけでなく、いつも以上に思考も要求する展開を伴う活動となるため、単元の導入を工夫した。学校図書館司書との連携で、音楽室でのブックトークを取り入れた。司書によるブックトークのテーマは「私にとっての出会い」である。写真集・エッセイ・資料集・美術書など、一見すると音楽とは関係のない本が紹介されたが、それぞれの出会いに“本当の出会い”“自由に会おう”“すでに出会っているもの”“違和感に出会う”“比較との出会い”といったキーワードを与えることで、自分と音楽との出会いと向き合う生徒たちの思考の間口が広がっていった。また、自分が思いもよらなかったような切り口を司書が紹介することによって、多角的な視点で物事をとらえる姿勢に興味をしめす生徒もいた。導入の最初の段階で「自分の音楽史を書こう」と提示しても、おそらく好きな曲や思い出の曲を漫然と並べるだけになってしまっただろう。ブックトーク後に自分の音楽史を書くように設定したことで、書き記す音楽や曲に対する自分の意味を考えると意識を持たせることができた。なお、ブックトークで使用した書籍は、図書室で別置図書として閲覧できるようにしてもらった。授業内で関心を持った生徒や音楽を選択していない生徒にも手に取れる機会を設定した。

各自が書き上げた「わたしの音楽史」を仲間と共有することで、同じ音楽や曲が人によって異なる意味を持つことや、同じ意味を持っているのに全くジャンルの異なる音楽や曲があることなどに気づくことができた。さらに、

自分の音楽史に記された曲を仲間と奏することで、同じ思いを重ねることの安心感や、思いは異なっても演奏する心地よさは味わえることなどを体感していた。

4. 評価の実際 ～単元における生徒の変容と今後の課題～

生徒たちは、複数名が挙げた合唱曲「証」(山村隆太作詞 阪井一生作曲 加藤昌則編曲)と「桜の季節」(ATUSHI作詞 ATUSHI・マシコタツロウ作曲 加藤昌則編曲)の一部分の演奏に取り組んだ。いずれの曲も生徒たちが中学生だった頃にNHK合唱コンクール中学校の部の課題曲となった曲である。生徒たちの中には、自分たちで演奏したことがある者、自分たちは歌っていないが他のクラスが歌ったので聴いたことがある者、全く初めて者が混在していた。音取りをしてパートを重ねていく中で、それぞれの音を聴きながらハーモニーを作っている様子が息づかいからも感じ取ることができた。学習感想には、以下のような記述がみられる。

- ・クラスや仲間と同じ曲をつくりあげる合唱は、素敵なものだと感じた。
- ・証はとても思い入れのあるもので、合唱祭でみた全員が一生懸命歌っている姿がよみがえってきました。このような歌へのせられた思い出、これからも大切にしたいです。

合唱曲について語る時に生徒は、“自分は”ではなく“自分たちは”で語り始める。彼らにとっては、音楽やその練習過程を共有した仲間の存在が欠かせないことがうかがえる。生徒たちにとって、曲目は異なるが同じ思いに至る経験が合唱に取り組むことでできていることがわかる。

鑑賞曲としては、「くるみ割り人形」より“金平糖の精の踊り”(チャイコフスキー作曲)と「ラデツキー行進曲」(シュトラウス作曲)を取りあげた。中学校までの授業で鑑賞したことがあるだけでなく、演奏会で生演奏に触れたり、合奏で演奏をしたり、自分がバレエを踊った生徒がいた。小学校で「ラデツキー行進曲」を演奏した生徒は、次のような学習感想を書いている。

- ・ラデツキー行進曲の大変さと感動は本当に忘れない。もっと楽譜を読めるようになりたい。

また、この生徒は授業でオーケストラの演奏を鑑賞した後に「観客とともにオーケストラが一体となってつくりあげる曲。指揮者が観客に指示を出すというのが斬新だし、そういうところが音楽って創作者にもすぐなれるし、聴く人にもすぐなれるしってところが、音楽の楽しさを教えてもらった曲かな。」

と発言し、手拍子で演奏に参加できる曲へと対話が進んでいった。

授業終盤で、これから自分は音楽とどのように付き合っていくかを発問すると、

「今まで僕が聴いてきた曲は、中学校まではJ-POPとか、だいたいそういうのだったんですけど、中学や高校の音楽の授業でさまざまな合唱曲とか聴いていくうちに、その中にも好きだなんていう曲が見つかったので、そういういろんな曲、J-POPにこだわらずにいろんな曲を聴いて選り好みせず、これからも聞いていきたいと思いました。」

「今まで音楽ってというのは、自分にとって大きなターニングポイントになっていることが多くて、最初はピアノから始めたんですけど、ピアノから歌うことが好きだなんて気づいて、歌うことが好きっていう気持ちから合唱につながって行って、合唱に入って友達と出会えて、結構これまで繋がってきているから、意図的になんか私は音楽が好きだから、音楽が好きっていう気持ちを大切にしていけたら、例えばそういう音楽が好きで友達同士でお互い良い刺激をしあって行けるんじゃないかなって思えるので、これからはジャンルとらわれないで、いろんな音楽に触れていきたいなって思います。」

という意見が出ている。これらは、本校の音楽の本質的な問いである「これまでの自分と音楽との関わりを振り返り、その意味を再認識して、これから先の生涯にわたる音楽とのつきあい方の指針を持つ」に対する、彼らなりの答えである。同様の意見は、学習カードへの記述にも複数見られる。

このように題材は教師が設定しているが教材は生徒の中から挙げてくる活動では、教師の音楽と向き合う姿勢が重要である。活動に寄り添う教師が柔軟な音楽性で生徒と接し、その多様性を受け入れた上で互いの価値を認め合えるような場の設定と、個人にとっての価値はさまざまであり優劣がつけられるものではないことを教師自身が強く自覚しておくことが欠かせないと実感している。

5. 引用文献

- ・生涯学習理論を学ぶ人のために(赤尾勝己編 世界思想社 2004年)
- ・「マイミュージック」を育て、培い、養う音楽授業 - 授業をクリエイティブにする為に不可欠なもの(小川昌文 音楽教育実践ジャーナル vol.12 2015年)

公開研 公開授業 I

芸術科（書道）「古代文字の魅力を探る」

授業者 荒井 一浩

1. 「本質的な問い」の設定

本校の芸術科書道では、書道Ⅰ書道Ⅱの2年間の鑑賞や表現の体験的な活動を通して、書の美の本質に迫ることを意図している。「本質的な問い」として「書の美を構成する要素は何か」「なぜ書を鑑賞して心を動かされるのか」を設定して年間カリキュラムを構成している。

本単元では、5つの資質・能力のうち「A 課題を発見する力」、「B 科学的なプロセスで問題解決する力」および「D 展望・計画をもつ力」の「資質・能力」に着目した。「A 課題を発見する力」では、現代の書作品を鑑賞する学習において古代文字が作品効果に生かされていることに気づくことで、書の美を構成する要素の一端について知ることができる。「B 科学的なプロセスで問題解決する力」では、篆書が紙が発明される以前に残された文字であることを知り、書かれた目的と媒体、表現との関係を考えることで、書の美に繋がる歴史的な基盤について考えることができる。「D 展望・計画をもつ力」では、篆刻の学習を踏まえた篆書の文字構造の理解が、瓦当の美の理解に生かされることで書の美の本質に迫ることができる。つまり、本単元で学習目標とした「古代文字の持つ造形上の魅力とは何か」がカリキュラム上の「本質的な問い」に繋がっていることになる。

芸術科書道では、生涯にわたり書を愛好する心情を育てるとともに、表現と鑑賞の能力を伸ばし、書の伝統と文化を理解する。鑑賞学習において古代の中国における漢字の発生に思いを馳せ、古代と現代をつなぐことで、生涯にわたり書を愛好する心情を育むことができるだろう。篆刻の実習を中心とした表現学習を通じて文字構造を踏まえた書の伝統と文化を理解していき、さらに古代と現代をつなぐ課題に気づき、書の媒体と表現の関連を考えることで課題解決を図り、篆刻の実習を瓦当の美の理解に生かすことを見通せる力を育成していくことを考えて展開を図った。

2. 評価方法 ～ パフォーマンス課題の設定 ～

「古代文字の文字構造や書道史上の位置付けを理解し、書道Ⅱの後半で制作する条幅作品に押印する自用印を制作する」というパフォーマンス課題を設定した。古代文字の概要について学んだあと、検字・草稿・印稿・布字・刻印・押印・補刀の各過程において記録を取りながら、育てたい「資質・能力」を評価する。また、古代文字を素材とした現代書の鑑賞文や篆刻で培った篆書の文字構造を瓦当の美に生かしていく表現学習の課題からの評価を試みる。

3. 単元計画

第1時	古代文字を知る(1)	甲骨文 発見の経緯や甲骨の内容を知り、その特徴を考える 金文 甲骨との相違や鑄込まれたことによる線質について考える
第2時	古代文字を知る(2)	石鼓文 石刻文字について知り、篆書の変遷を考える 泰山刻石 小篆の特徴をつかみ、「皇帝」を半紙に書く
第3～8時	篆刻の実習	白文の自用印を刻す 選文 検字 草稿 刻る文字を決め、字を調べ、小筆で草稿を立てる 印稿 印稿のカードを作り、原寸大の下書き・原稿を作る 布字 印稿を鏡を使って反転させ、印面に書き入れる 刻印 運刀法を学び、布字の通りに、思い切って刻る 補刀 修正すべき点を考え、補う 押印 印を完成させ、押印し、プリントに書き込みを行う
第9～10時	古代文字の魅力を探る	古代文字の現代性について考え、その魅力を感じ得る ・青山杉雨「萬方鮮」 甲骨文「萬方鮮」を甲骨文を手がかりに鑑賞する ・金文 石鼓文 楚帛書 泰山刻石 里耶秦簡 書かれた目的と媒体、表現との関係を考える ・瓦当 篆刻の学習を踏まえた篆書の文字構造の理解が、瓦当の美の理解に生かされることを知る

4. 評価の実際 ～ 単元における生徒の変容と今後の課題 ～

生徒の振り返りの記述から生徒の変容を探ってみたい。①は青山杉雨「萬方鮮」を鑑賞しての第一印象、つまり直感的鑑賞の記述、②は甲骨文字と「萬方鮮」との関連を学習した後に再度「萬方鮮」を鑑賞した時の記述、③は単元全体の学習を振り返っての記述である。傍線は授業者が付した。

【生徒A】

- ①文字が読めない。左上の文字が特に記号のように見える。文字がかすれているところが迫力あると感じた。白紙全体に字が書かれていて、力強いと感じた。
- ②甲骨文字を少し崩して書いていた。初めは、四文字で何かが書かれた作品のように思ったが、甲骨文字から現代の漢字になる過程を参照して、三文字であったことに驚いた。昔は紙がなくて彫っていたために「萬方鮮」の作品のようなスピード感やかすれは出せなかったが、現代、紙を用いて古代文字を書くことで、新たな魅力が感じられると思った。
- ③文字に絵画的要素があったり、行政文書やトの記録などの目的も、書いていたものも時代によって全く異なり、文字に時代を感じることができおもしろく感じました。また、瓦当に挑戦し、実際のものを見ると、私のものと当時のものだけでなく当時のものの中でも違いが見られるけれど、特徴は同じで面白かった。

【生徒Aの記述から考える】

まず、読もうとしている。これは多くの生徒に共通する。可読できずとも「かすれているところが迫力ある」「力強いと感じた」と一面的ではあるが感性を働かせていることがわかる。続いて②の段階に行くと「スピード感」「かすれ」というより具体的な記述となり、「新たな魅力が感じられる」という言葉で、紙という用材と作品としての「新たな魅力」を結びつけている。③では「文字に時代を感じる」「違いが見られる」という表現の多様性について言及しているが、「特徴は同じで」と篆書の文字構造の理解に踏み込んでいることがわかる。

【生徒B】

- ①かすれていたり、墨が飛んでいたりして、豪快に書いています。紙いっぱいに書かれていて迫力がある。文字の配置が真ん中に一文字あたりと工夫されている。紙いっぱいであるけれど、余白が実はたくさんあると感じた。全ての文字が読めず、形から文字を想像できない。
- ②古代の甲骨文字に線の太さの変化や濃淡をつけることによって、絵画的な文字が「書」と感じられるようになるのは面白いと思いました。現代的な「書」に古代文字が使われることは、もちろん考えたこともなかったので、少し驚きました。字形も崩し過ぎているわけでもなく芸術という「書」になっていることがわかりました。
- ③古代文字は絵画的な要素が残っているものが多いことがわかりましたが、印に刻りやすいように形を変えたり、瓦当として見やすいように丸く形を変えたりしていて、しかし、そのどれもが読めるというのはすごいことだと思いました。絵画的でありながらも、「書」として見ることができる古代文字は不思議だと感じました。

【生徒Bの記述から考える】

この生徒は①の段階から細かな観察を行なっている。「かすれていたり」「墨が飛んでいたり」という表現上の工夫だけでなく「配置が真ん中に」や「余白が実はたくさんある」というように構成上の工夫にまで目が向いている。また、生徒Aと同様に可読したいという思いは存在する。②になると「線の太さの変化や濃淡（ここでは潤濁か）」が「書と感じられる」「芸術という書になっている」というように書の美を構成する重要な要素であることに気づいている。③では、古代文字の絵画性に触れながら、篆書の表現の広さや面白さを感じていると見て良いだろう。

【成果と今後の課題】

生徒の記述を見ていくと、「本質的な問い」として設定した「書の美を構成する要素は何か」「なぜ書を鑑賞して心を動かされるのか」についていくつかの気づきと発見をしている姿を認めることができる。今回の実践では、用具・用材、つまり筆墨性に長けた現代の書作品と甲骨にナイフで刻み込む甲骨文を対比させることで、生徒の感性に訴えかけ、気づきを誘発した。「力強さ」や「迫力」の一端が筆墨の工夫にあることを知れば、今後の表現活動にも寄与するところが多いであろう。また、この学習活動を通して、古代文字が面白い、魅力的という感想が多く見られたことは、書の鑑賞力の向上に一定の意味を持ったと捉えることもできるだろう。今後は同様の体験を他の領域でどれだけ行うことができるかにかかっていると考える。鑑賞学習を表面的にはなく、先人の書論など既存の成果を踏まえた上で、深い学びに結び付けられるよう取り組んでいきたい。

公開研 公開授業Ⅰ・Ⅱ

英語（英語表現Ⅱ）「グループワーク表現活動」

授業者 光田怜太郎

1. 「本質的な問い」の設定

1年次のコミュニケーション英語Ⅰ・英語表現Ⅰ及び、現在履修中のコミュニケーションⅡで身につけた英語力を活用し、自分の考えをまとめて、その場で説明できる能力を養うことで、本校がキーコンピテンシーとして掲げる5つの資質・能力のうちの「課題を発見する力」、「発信する力」、「関係を構築する力、協働する力」の伸長を目指す。

2. 評価方法 ～ パフォーマンス課題の設定 ～

ディスカッションの様子や、ワークシートの取り組みを観察して、英語で自分の意見を述べる力や、自分の考えを表現する力、コミュニケーションを展開する力を評価する。

3. 単元計画

年5回にわたり、留学生を交えてディスカッション活動を行う。1年次に培った発表活動の経験を発展させ、より高度な内容を英語で述べたり、やりとりしたりする力を養う。発表活動はその場でトピックを与えられ自分の考えを述べるものから、事前にリーディング課題やライティング課題を通して自分の意見をよく練った上でディスカッションに臨むものまで、様々な形式のものを経験するなかで、表現・発表活動に必要な言語能力を育成する。また、留学生と交流し外国人と実際にコミュニケーションを取ることで、日頃の英語の学習で学んだことを実際に活用する体験をする。

第2回にあたる本授業では記事をあらかじめ読んだ上でリテリング活動を行い、それについて留学生と質疑応答をふまえ話し合う。リテリングとは白畑ら（2009：297）によると、「リーディングを通して理解した教科書本文の内容を、口頭で再生する活動」である。暗唱とは異なる。題材の内容は、「日本における不思議な習慣（旅行に出かけたからおみやげを職場に配る、手刀をきって『すみません』といいながら人の前を通る、映画のエンドロールを最後まで見るなど）」である。日本人から見たら常識的なことでも外国人からみたら不思議に見えることを知り、多角的な視野でものごとを見る経験をしてもらいたい。

4. 評価の実際 ～ 単元における生徒の変容と今後の課題 ～

英語科では読む・聞く・話す・書くの4技能の育成が求められているが、これらのうち話すことの評価というのは極めて難しい。ペーパーテストと異なり、厳密な採点は不可能といえる。例えば、被評価者がピアノの演奏をし、1人の評価者がそのパフォーマンスを1点刻みの100点満点で評価するのは不可能であろう。40人のクラスサイズで各グループで留学生を交えて議論しているのを観察し、1人1人のスピーキング能力を測ることは、まったく現実的ではない。現実的に可能なのは一人一人の事後の自己評価であろう。

昨年度より展開されている留学生授業では、毎回各授業の最後に次のルーブリックを用いて自己評価を行っている。

	キャップストーン	マイルストーン		ベンチマーク	自己評価
	4	3	2	1	
コミュニケーションの展開	会話が夢中になることができる。	会話に興味をもち積極的に参加できる。	グループの会話が途切れないよう、言葉を発することができる。	グループの会話が途切れることがあるが、意思表示はする。	
話すこと	自分の考えを伝えたり、話題を発展させたりすることができる。	自分の考えをしっかりと伝えることができる。	自分の考えを断片的に伝えることができる。	尋ねられた際、返事や応答を行う。	
聞くこと	話の展開を予想しながら聞くことができる。	相手の考えをしっかりと理解することができる。	相手の考えを断片的に理解することができる。	何について話しているのかを理解する。	

単元における評価ということで、本単元は年間5回に分散されている特殊な構成をしている。今回は、本研究大会で行われた6月の本授業（留学生授業2回目、以下第2回）と、11月（留学生授業3回目、以下第3回）の自己評価のデータを比較しながら、生徒がいかに変容したのか見てみたい。なお、第3回の内容は、生徒の事前準備は必要とせず、留学生の国について質問し、また留学生からの日本についての質問に答える、というものである。

2017年度2学年に在籍している人数は337名である。そのうち、第2回の授業に出席しループリックを提出した生徒は301名、第3回は302名であった。今回は自己評価の変遷を追跡するため、両方の授業に参加し、かつ、全ての項目にもれなく回答した生徒以外のデータは捨象する。その結果、今回の自己評価の分析対象となる生徒は273名となった。

自己評価の全対象生徒の平均をもとめると次のようになる。

	第2回			第3回		
	コミュニケーションの展開	話すこと	聞くこと	コミュニケーションの展開	話すこと	聞くこと
自己評価の平均値	2.46	2.54	2.63	2.49	2.53	2.79

まず、ループリックにおける3つの項目について、自己評価は第2回・第3回共通して「コミュニケーションの展開」、「話すこと」、「聞くこと」の順番で高くなっている。「聞くこと」がもっともできたと感じているということである。「話すこと」と「聞くこと」は4技能のうちの2つである。受信より発信の方が確かに難しいのかもしれないが、それが数値として表れたのは興味深いことである。言葉およびジェスチャー等を用いてコミュニケーションを展開することにはさらに自己評価は低くなることが示された。また、それぞれの数値の第2回から第3回への数値の変化に注目してみると、「コミュニケーションの展開」や「話すこと」はわずかな変化が見られるが、「聞くこと」は0.1ポイント以上の上昇が見られ、全体としてみると「聞くこと」の自己評価を高くつけた生徒が多いように見える。では、多くの生徒が前者2者についてほぼ同じ自己評価を、「聞くこと」については第3回の方がより高い自己評価をしたのだろうか。次の表を参照されたい。

	コミュニケーションの展開	話すこと	聞くこと
上昇	83	69	78
変化なし	115	132	157
下がった	75	72	38

これは第2回から第3回にかけて、自己評価の数値がどのように変化したのかを示したものである。例えば「話すこと」では全体平均ではほとんど変化がないように見えるが、69名の生徒が第2回より第3回の方ができたと自己評価しており、72名の生徒がよりできなかったと自己評価している。「コミュニケーションの展開」の動きも「話すこと」に近いが、「聞くこと」に関しては自己評価が上がった生徒が下がった生徒の2倍おり、全体としての平均の上昇につながっている。

当初、回を追うごとに自己評価は上がっていくと思っていたが、「話すこと」については自己評価はむしろ下がっていた。これは、第2回では事前に読んだ記事についてリテリングを行う活動を含んでいたため、あらかじめ頭の中にある情報を再現するスピーキング活動であったからと思われる。第3回は事前準備を必要としない活動であったので、即興性が求められたのである。

この分析から、「話すこと」を促進させる指導の展開が課題であるといえる。受け身にならない態度を身につけるため、会話の機会を保証することが求められる。

5. 引用文献

白畑知彦・富田祐一・村野井仁・若林茂則.(2009).『改訂版英語教育用語辞典』東京：大修館書店

公開研 公開授業Ⅱ

国語科（古典B）「記録的な文学に見られる言葉の重みを考えよう

—「養和の飢饉」（『方丈記』）における「あさまし」の含意—

授業者 浅田 孝紀

1. 「本質的な問い」の設定

今回の授業では、『方丈記』の「養和の飢饉」を主教材として取り上げた。浅田は、最終的に3年次の終わりには、「人間にとっての『古典』の価値とは何か」を論じられるようになってほしいと考えている。そこで2年次末には「自分にとっての『古典』を学ぶ意義は何か」を、少なくとも学習済みの作品群については論じられるようになることを目標にしている。言い換えれば、ウィギンズらの言う「本質的な問い」をこのように設定し、少なくとも高校2年の初めの段階より多くの作品を深く学んだ後で、単なる受験科目ではなく自分の人生にどのように寄与してくれるものであるかを論じられるようになってほしい。それゆえ、様々な作品に接するとともに、その表現を読み味わうことを通して、古典に関する考えを知的あるいは感性的に表出する力をつけていきたい。そのためには、「資質・能力」として、古典を読む（いわゆる読解する）ことのできる言語的能力を活用しつつ、歴史的背景や使われている古典の表現から作品の魅力を感じ得る資質が必要である。本単元では、中でも実体験に基づく文章の言葉の「重み」を発見し、そこに根拠を与え、そこから人間の「思い」へと考えを及ばせ、かつ表現し発信することのできる力を、協働する力とともに身につけさせたいと考えて実施した。これには古典の文章自体を読み解く力を基礎にしながら、調べ・考え・発表する学習が必要になる。そのため、年間を通して説話・随筆・日記・物語・詩歌・史伝・思想等、古典（古文・漢文）の各分野を学びながら力を蓄え、年度の終わり頃には「特定の作品のPRをする」単元を計画している。古典全体について「人間にとっての『古典』の価値」を、少なくとも文学について論じられるようになるのは三年次に譲るが、そこを目指して今年度のカリキュラムを設定し、当日はそのプロセスの一端をご覧いただいた。

2. 評価方法 ～パフォーマンス課題の設定～

「パフォーマンス評価」：話し合いおよび発表場面の観察と、自己評価のためのルーブリックと事後の作文によって評価。

「その他の評価」：単元全体における授業中の各個人の取り組みを見る他、知識・内容理解の面は通常の定期考査で評価。

3. 単元計画

① 対象 2年G組（男子21名、女子21名 計42名）

② 単元名 『方丈記』

③ 単元の目標

- (1) 随筆としての『方丈記』の内容面・表現面での特質を捉え、長明の無常観を理解する。
- (2) 長明の思いが込められた表現を汲み取り、その言葉の重みを言語化して記述・発表する。
- (3) 上記(1)(2)をThink-Pair-Shareやジグソー法を用いて協働で力を発揮できるようにする。

④ 指導計画

(1) 単元計画（6時間）

第1次：『方丈記』の概要と「行く川の流れ」を、Think-Pair-Shareを取り入れながら文体の特徴と長明の持つ無常観について理解する。（2時）

第2次：「養和の飢饉」を中心に、五大災厄の箇所を各班で分析し、ジグソー法により共有する。（2時）

第3次：「養和の飢饉」にある長明の心情表現を指摘し、その言葉の重みについて言語化していく。（本時）

第4次：各班で考えた「表現の重み」を発表し、「養和の飢饉」の表現に関する鑑賞文を書く。（1時）

(2) 本時の学習（5/6時間目）

A 本時のねらい

各班内の専門家グループのメンバーが読み込んできた文章を付き合わせることで、長明による心情表現(生徒には「情念を表す表現」と称して、思いの強い箇所を意識させている)を指摘し合い、そこにどのような思いが込められているかを話し合ったうえで、それを記録し各班で共有して、次の発表のための準備をする。

B 本時の授業展開

分	学習の流れと生徒の活動	教員の指導と手立て
2	挨拶・点呼	作業グループごとに行う
15	各班内の専門家グループから、飢饉以外の4つの災厄の概要と心情表現を聞き取る。	前時までに、専門家グループに各災厄の文章を割り当てて、内容や表現を把握させておく。
20	比較検討グループで5つの災厄を2つに分類し、その根拠を考える。	各班(比較検討グループ)の全員に心情表現(有無も含め)や状況に直目するように促す。
10	他の4つの災厄との比較を土台としながら、「養和の飢饉」の心情表現のうち「重みがある」と思われるものはどれかを、各班で根拠とともに討論して指摘する。	各班での議論を巡視しながら、話し合い進行状況を見極めていく。本時の評価としては、主にルーブリックのA・B・Eに基づいて、班毎に形成的評価を行う。
3	状況の確認と次時の予告・挨拶	各班でそれぞれ指摘できたかどうかを確認するが、指摘しきれない班もあるものと予想されるので、次回までに考えておくことを促す。

4. 評価の実際 ～ 単元における生徒の変容と今後の課題 ～

以下のルーブリックを用いた自己評価と、事後の作文(『養和の飢饉』の鑑賞文)によって評価した。

	4	3	2	1
A: 課題を発見する力	長明の思いが強く込められた箇所を複数発見できる。	長明の思いが強い箇所を一箇所は発見できる。	長明の思いの強さを、感覚的には感じ取れる。	教材文の内容からその状況を理解することはできる。
B: 科学的なプロセスで問題解決する力	歴史的背景等も傍証として根拠付けを強固にできる。	語彙や文法を基に、自説に根拠づけができる。	教材文の内容を基に、自説を組み立てられる。	友人の説にだけは納得したり疑問を持ったりできる。
C: 発信する力	学級全体に向けて説得的意見が言え、文章化できる。	学級全体に向けて根拠のある意見が言える。	グループ内で、教材文に基づいた意見が言える。	グループ内でなら根拠がなくても意見が言える。
D: 展望・計画をもつ力	過去の学習経験も踏まえ今後の学習方向を考え得る。	今後の学習で留意すべき方向を確認できる。	言葉の重みの強弱があることを理解できる。	言葉の意味の表面的な解釈はできる。
E: 関係を構築する力、協働する力	自己の意見も言いつつグループの意見を纏められる。	積極的に意見を言い、グループに貢献しようとする。	グループ内での協議に参加しようとする。	グループ内の他者の意見を聞くことはできる。

自己評価では、ほとんどの生徒が各項目を2または3にしていたので、全体としては本時の目標は達成し得たと考える。また、事後に提出させた『養和の飢饉』の鑑賞文では、多くの生徒がきちんとした鑑賞文になっていたが、一部生徒は単なる「感想文」になっており、表現そのものではなく内容にのみ惹かれてしまっていた者もいた。古典の学習において原文の言葉に注目することは必須であり、それを明確に意識化させることを今後の課題としたい。

5. 引用文献

・浅田孝紀(1999)「『養和の飢饉』(『方丈記』)冒頭部における「あさまし」―「あさまし」に込められた長明の思いを汲み取る試み」『人文科教育研究 第26集』人文科教育学会

公開研 公開授業Ⅱ

教科（地理B）「EUのその向こう ～統計が変わっても世界をとらえる目を養う～」

授業者 栗山 絵理

1. 「本質的な問い」の設定

〈地誌学習の本質的な問い〉として、「世界の諸地域はどのような特徴があるだろうか」を設定した。問いに向けて活動することを通じて、〈地誌学習を通じて獲得したいコンピテンシー〉は次の3点が挙げられる。

- ①地図（地形図・地図帳の地図・主題図など）を読み取り、活用することができる。
- ②統計や地理的資料を読み取り、活用することができる。
- ③これからの地域的展望（世界の諸地域・日本とアジア・持続可能な地域設計など）を述べるすることができる。

〈ヨーロッパを題材にした単元の本質的な問い〉として、「ヨーロッパの特色とEUの拡大に伴って生じる課題と今後の展望はどのようなものか」を設定した。問いに向けて活動することを通じて、〈ヨーロッパの地誌学習を通じて獲得したいコンピテンシー〉は、「ヨーロッパの地図や統計・資料を活用し、ヨーロッパ地域の地誌的な展望を述べるができる」ことである。今回の授業を通じては、5つの重点課題のうち、とりわけ「A：課題を発見する力」の育成に焦点をあてた。

〈関心・意欲・態度／思考・判断・表現／資料活用の技能／知識・理解の評価規準に関連する5つの重点課題〉

	A 課題を発見する力	B 科学的なプロセスで 問題解決する力	C 発信する力	D 展望・計画をもつ力	E 関係を構築する力, 協働する力
本時	◎	○	○	-	○

2. 評価方法 ～パフォーマンス課題の設定～

3年次の地誌学習において、ジグソー法やグループディスカッションを組み込んで授業を構成する機会はこれまでほとんどなかった。今後、次期学習指導要領で予定されている選択履修科目「地理探究（仮称）」を見据えて、定期的に今回のような授業を取り入れて生徒一人ひとりの永続的理解の形成を促したい。グループ活動における関心・意欲・態度、課題やコメントシートにおける資料活用の技能・思考・判断・表現、定期考査における知識・理解を評価の対象と想定した。継続的な取り組みが必要との判断から、第2回目として「中米諸国」について同様の方法で授業を行った。その結果、第1回目の経験を活かしてよりスムーズかつ効果的にパフォーマンス課題を設定した授業を実施できた。定期的なパフォーマンスを求める授業の実施は、個々の生徒および集団のパフォーマンスの質の向上につながると考えられる。

3. 単元計画

(1) 単元計画：「ヨーロッパ」

- 1～8 時間目 西欧諸国とEUの発展
- 9～13 時間目 南欧諸国・北欧諸国の特徴
- 14～16 時間目 東欧諸国とEUの展望（本時）
- 17～18 時間目 バルカン半島の国々とバルト3国
- 19～22 時間目 ロシアとCIS諸国

(2) 本時の学習（15/22時間目）：「東欧諸国とEUの展望② EUのその向こう」本時のねらい

2004年以降にEU加盟を果たした東欧諸国の特色を掴むとともに、EU拡大に伴って生じる課題と世界の地域統合の今後の展望を考察する。

4. 評価の実際 ～ 単元における生徒の変容と今後の課題 ～

生徒のコメントシートからは以下のような「課題の発見」と「科学的なプロセスで問題解決をする力」を活用した地域的展望（ヨーロッパの事例から日本を含むアジアへの地域的展望の応用）が得られた。

EU域内の経済格差（主題図の読図）（※以下、先頭の番号によって同一人物のコメントを示している。表現は原文のまま。）

1. 国全体が豊かと言えるのはドイツ・チェコ・スウェーデンくらい。東欧諸国も首都は繁栄している。
2. 首都だけGDPが多く、国内格差がある。西欧と東欧で経済的格差があり、東欧諸国は貿易総額が少ないうえ、赤字である。
3. ヨーロッパの東西を比較すると西欧の方がGDP・GNIともに高く、東西で経済格差が起きている。国のようすを図1から読み取ると、首都や首位都市周辺のみが栄えている国が多い。これは、経済発展しているイギリスやドイツにもあてはまる。
4. 全体的に西ヨーロッパ>東ヨーロッパの状況だが、特に東欧では数十年前まで社会主義国だったこともあり、特に国内での格差が大きい。

2045年（30年後）のEU加盟国の変化とEUの経済格差の変化（統計の読み取り）

1. 貧しい国が入ればEUとしては格差が広がる。しかし、トルコが入れば、EU内に流れるモノ・人・金は格段に増えると考えられるので、物流の拡充が発展につながる…？
2. 関税がかからないことで輸入のハードルが低くなる一方、東欧諸国は重工業品の多くを輸入に頼ってしまうと考えられるため、格差は拡大すると思われる。
3. アルバニアとセルビアはEUに加盟を果たすと思う。経済的に発展していない国も加盟をすると格差は大きくなるのではないか。
4. マケドニア・モンテネグロ・セルビアは加盟する。アルバニアとトルコは加盟に時間がかかる。EUがどんどん広がって、それが原因で大きなEU改革もしくはEU崩壊までであると思う。

東欧諸国の地理的条件（地誌的展望の考察①）

1. 東欧諸国はイスラーム世界の玄関口、西欧諸国にとっては緩衝地帯にあたる。
2. 山地が多いため、貿易の際の輸送はしにくく、輸送費がかさんでしまう。
3. EUとASEANの間に位置している。EUはイギリスが離脱して経済的に厳しい状況になる可能性があるが、「1つの家」としてまとまりをもっている。
4. EUにとって東欧諸国は非EU国家である旧ソ連諸国と陸で国境を接している地域であるから、そこを重点的に支援していくと思う。

アジアの地域統合の展望（地誌的展望の考察②）

1. アジア統合は中国が勢いを増して進めるだろう。日本は存在感を示していけるか課題。
2. アジア地域でもASEANに、日本・韓国・中国を加えた地域経済協力の構造があるが、そこでブロック経済化してしまうことでかえって全体の経済成長を妨げてしまうことが考えられるため、実現は難しいと思う。
3. ASEANをはじめとする東アジア経済圏は、アジア通貨危機を契機に地域協力をすすめている。よって、東欧諸国はヨーロッパとアジアをつなぐ位置にあり、EUに加盟すると、両者の経済的統合も期待できるのではないかと考えた。
4. アジアでも今後同じようなものができるかもしれないが、民族性の違いから崩壊すると思う。

横断的または量的に分析をすれば、主題図の読み取りはおおよそ正しく捉えられている生徒が多い。一方、統計の読み取りは、大量な情報量から必要なことを的確に読み取って地域的な展望を推察することは難易度が高く、部分的な読み取りや既知の知識から考察をしているにとどまっている生徒が多い印象である。「地誌的展望の考察」は正答のある問いではないが、国際社会の一員としてこれから生きる高校生たちが論理的に考察することには意義がある。事例に挙げた生徒の意見は、いずれも地理的視点を活かした鋭いものばかりである。このように、展望で示された意見を逆算し、縦断的または質的に意見の構築の過程を分析・評価する必要がある。パフォーマンスを含む授業では、パフォーマンスの「質」を重視して、従来の定期考査等に代わる客観的な評価をいかに充実させていくかが今後の課題であると言える。

公開研 公開授業Ⅱ

教科（家庭科）「エプロン製作を通して消費者の視点を考えよう」

授業者 阿部 睦子

1. 「本質的な問い」の設定

家庭科では、学習指導要領によると、生徒各々がよりよい生活を営むため工夫・創造し、体験や実践から習得した知識・技能を実際の場面に活用し、身近な生活から社会につながる課題を主体的に見つけ、その課題を地域、人権、福祉、環境等の視点から解決できる資質・能力を育成することをねらいとしている。その幅広い社会形成の一員としての自負を、過去から未来へと受けつなぐ縦軸と現在の社会や人々との関わりの中で発展させて行くという横軸を意識してカリキュラムを組んできた。家庭科教育は総合的な教科であり、かつてはよく消費者教育と重ねて語られることがあった。その後、環境教育、金融教育など、関わりの大きい領域との関連で語られ、時代の要請とともに現在に至っている。そして、常に日々の生活に根差し、人びとのより良い生活の構築に向けて市民性を育んできている。

本単元は、衣生活の内容を扱うが、現代の衣生活では被服が家庭内で作られるのではなく外部、それも海外での生産に拠点を移している。このことについても触れ、生活を見つめなおす機会としたい。また、各教科で学習した内容を咀嚼し、総合的に捉えなおす場となるとも考えられる。そのような点を踏まえ、本校のループリックに記載されている5つの重点課題の内、特に「A 課題を発見する力」、「D 展望・計画をもつ力」、「E 関係を構築する力・協働する力」の形成の一助としたい。公開授業では、エプロンの製作段階の終盤の時期に製作の振り返りと併せ、丁寧に作ることの意味や手作りしたからこそ分かる市販の商品の価値について話し合い、消費生活について考えさせたい。そして、本質的な問いを、「どのようにすればより良い消費生活を創造することができるか」と設定し、生徒とともに授業を設計したい。

2. 評価方法 ～ パフォーマンス課題の設定 ～

製作面での技能評価は、パフォーマンス評価として授業時に示したもので行った。その他評価は、授業時毎の取り組みの評価、各課題毎の評価、単元終了時の評価など何段階か評価を行い、技能や生活体験に差がある生徒の衣生活の学習に意欲を持って取り組めるようにした。最終的に評価する方法としては、エプロン製作後に振り返りとして提示したループリックによる生徒の自己評価を教師による評価と照らし合わせるとともに、作品の技能評価を製作段階毎に行ってきた技能評価表とも突き合わせて評価した。また、消費生活への活用については、生徒の記述から読み取り評価した。

3. 単元計画

家庭基礎では、衣生活に関しての扱いが「被服管理と着想」の項目のみとなっており、被服製作は特段取り上げられていない。しかし、家庭科の目標には、「基礎的・基本的な知識と技能を習得させ」や「生活の充実向上を図る能力と実践的な態度を育てる」という文言があり、生活技術として、針と糸を持ち、布地を適切に扱えることは大切である。更に、「生活課題を主体的に解決する能力」として、日常の衣生活を消費生活の中にきちんと据え置き、消費者の視線だけでなく、生産者の視点でも物を見る力をつけることで、持続可能な社会の一員としての「生きる力」を具現化していけるのではないかと考える。家庭科の授業時間の減少から、小学校・中学校と家庭科を学習してきても被服製作に関する経験は減少してきており、被服に関する知識はあまり定着していない。また、縫製に関する技能についても同様である。そこで、高校での家庭科の学習を男女が共に学ぶ最後のチャンスと捉え、授業時間内に完成できるように半完成品を用いてエプロン製作を行い、その縫製技術が日々着用している衣服に応用されていることに気付かせ、習得した知識と技能を消費生活に生かし、被服に使われている知識や技能を読み解く力を育成することを目指した。

本単元の指導時間は11時間扱いとし、導入部分の2時間に「被服材料の基礎知識」を取り入れ、被服製作の既習技能の定着を観るため、①「基礎縫い練習のための袋づくりをしよう」と題して被服検定4級の製作課題である袋作りを行った。本校は家庭基礎の2単位を2年生で行い、基本的に2時間続きで設定している。そのため、2回目の2時間で「エプロン製作の開始」をし、「被服の機能」を押さえ、エプロン製作上、首紐にボタンを付ける作業を行うので、②「ボタン付けをマスター

しよう」という項目をおいた。次いで、3次目の2時間で「着装の工夫」を既習知識と併せて確認し、③「腰ひもを付けよう」と題してエプロン本体に腰紐を付ける作業を行うこととした。ここでは、布地の性質を再確認することができ、エプロンとしての形が大筋整うので、規格通りに行う作業ではあるが、完成への目標が明確になる。次いで行う4次目の2時間では、「被服の管理」を扱うが、衣服の着用後の手入れ保管を扱うと共にエプロンの製作の④「ポケットを付けよう」ということで、実用的なエプロンの完成に近づくと共に、生徒の作品としての個性が出てくることとなり、目指す作品を仕上げるためには適切な技術が必要であると認識することとなる。次いで、公開授業の1時間であるが、エプロンが仕上がる前に、「エプロン製作を通して消費者の視点を考えよう」という時間を設けることで、被服製作の意義と意欲を認識するとともに、消費者の視点を取り入れた。特に、布地の生産拠点が海外に移されていることや製作したからこそその気付きはこの時間での班活動で深めたい。続いての5次目は「被服計画の必要性」を被服管理の知識として押さえ、エプロン製作の⑤「仕上げをしよう」というものである。

4. 評価の実際 ～ 単元における生徒の変容と今後の課題 ～

エプロン製作時に、実習の度に本時の課題としてパフォーマンス課題をルーブリックで示した。実習時の技能の定着、丁寧さが例年に比べて高い印象があったが、完成し提出されたものを観ても技能面での正確さは高くなっているように感じられる。

製作後の生徒の意見を以下に紹介する。

- ・自分が行ったことに対して客観的な視点で見ることができ、至らなかった部分など確認することができた。
- ・自分の進捗を確認でき、その日何をすべきかどこまでやらなければならないかを明確に感じるすることができた。
- ・エプロンの完成形と比較をして、何が足りないかをどのようにしたらよいかなどを発見できた。
- ・先の作業のことも考えて作業することで、よい仕上がりにすることができた。
- ・どの作業を優先して進めればよいかを毎回考えることができた。また、自分が縫い方の種類を知らなかったということがわかった。発見する力がついたので解決する力もついたと思う。
- ・何故この部分はこういう縫い方をしなければいけないのかといった被服の奥深い所まで理解しようと努めた。
- ・生地や繊維の特徴から材料のより適した使い方があると知り、目的に応じた使い方を工夫することができるようになった。
- ・場面場面においてどの縫い方が一番適切なのか考えることができるようになった。
- ・自分がどんな目的でエプロンを作りたいかを考え設計し作ったことで、作品の善し悪しを考えることができるようになったと思う。

このように生徒の意見は製作に関する意見が多く、ルーブリックを作成しエプロンを製作したことで生徒の被服製作に対する効果は上がったと考えられる。本質的な問いとして設定した「どのようにすればより良い消費生活を創造することができるか」に関しては、「何故この部分はこういう縫い方をしなければいけないのか」「生地や繊維の特徴から材料のより適した使い方」などを考える事ができ、被服を読み解く知識が身についたと考える。

今後、製作したことが消費生活に活かされるかどうかは、評価項目を更に作成して判断することが必要である。

5. 引用文献

- 「高等学校学習指導要領解説：家庭編」文部科学省 開隆堂 2010年
- 「消費者教育学の地平」西村隆男編著 慶応義塾大学出版会 2017年
- 「理解をもたらすカリキュラム設計」G. ウィギンズ/J. マクタイ著 西岡加名恵訳 日本標準 2016年

※公開授業Ⅰ

数学（数学B） 科学的なプロセスで問題解決する力を育む授業－数列を題材として－

授業者：佐藤亮太

については、佐藤（2017）にて別途報告した。

※公開授業Ⅰ・Ⅱ

理科（化学） 科学的な手法で考える「マンガン平面電池の製作と評価」

授業者：坂井英夫

については、坂井（2017a, 2017b）, Sakai & Kamata（2017）および松本ら（2017）にて別途報告した。

※公開授業Ⅱ

数学（数学I） 課題を発見する力を育む授業－二次関数を題材として－

授業者：菅原幹雄

については、菅原（2017）にて別途報告した。

4. 第16回公開教育研究大会を受けての課題

ここでは、各公開授業のまとめに加えて、各教科・科目での研究協議の記録から、「パフォーマンス評価」や「主体的・対話的で深い学び」、「カリキュラム・マネジメント」など本公開研の研究課題に関わる課題についてまとめたい。

4-1 パフォーマンス課題の設定や評価

（本質的な問いとの関連性）の観点より

前回の公開研より継続的に取り組んでいる「パフォーマンス課題」を、さらに充実させることが本公開研でのテーマの一つであった。ルーブリックを用いてパフォーマンスを評価することが効果的だった授業が見られた一方で、パフォーマンス課題をルーブリックで評価することの精度や妥当性などに言及する協議会も見られた。この点を踏まえつつ、今後も継続的に取り組んでいくテーマと言える。

- ・ルーブリック評価の目的は、(1)評価規準を明確にする：多くの作品を評価し続けると生徒の頑張っていた姿が思い出されて評価基準がぶれることがありがちだが、公平な評価を可能にする。(2)透明性がある：本来、評価規準を事前に提示し、生徒がそれに向けて学習に取り組むが、今回は生徒の知識や技能の定着が不確実なことに配慮して、製作が進んだ状態で提示し、生徒と

規準作りをしたのはよかった。このような被服製作学習のルーブリック評価の活用事例は今までにはないのではないか（家庭科 研究協議助言講師のコメントより）。

- ・評価の方法としてルーブリック表を用いたが、今回用いたルーブリック表で生徒の変容を適切に把握できたのか、ルーブリックがなくても従来通り個々の指導の記録だけでも把握できたのか、その効果の有無が判然とせず、協議会の中でも話題として取り上げた。示唆に富む助言を多くいただいたが、何に対するルーブリックなのかを共有すること、「本質的な問い」が生徒にも伝わるようにするためには、「題材名」を工夫することが大切であることが、特に課題であるとわかった。ルーブリックを作成することは、授業の改善に役立てることができていると授業者自身は感じている。一方で、生徒にとって意味があるものとなっているか、発想や構想を縛るものになっていないか、教師と生徒にとってよりよい学びにつながるよう今後も改善を重ねていく（芸術科工芸 公開授業のまとめより）。
- ・本校のルーブリックは、教員だけでなく、生徒にも浸透している面がある。具体的には、体育祭の演技評価などにおいて、生徒がルーブリックを作成し、教員に評価を依頼する面がみられた。このようなことから、ルーブリックは、本校の教員だけでなく、生徒とも徐々にではあるが、浸透し始めていると言える。しかし、これらは形式だけの面が否めず、中身まで浸透しているのかという疑問も存在する。また、ルーブリックの考え方は、教員の中でも構築され始めているが、言語として未だ発展途上にあることも事実である（公民科 研究協議の記録より）。
- ・評価する側とされる側、自分で自分を評価していくことの難しさが一つある。教員と生徒との食い違いも出てくるであろう。この部分をどのように整えていけばよいのかが課題として挙げられる（保健体育科 研究協議の記録より）。
- ・評価における精度はどうなのか。このような評価方法を繰り返しやっていくことでその精度はあがっていくのか（保健体育科 研究協議の記録より）。
- ・このような評価活動を行うことによって生徒がよくのび、活動的になることが重要である。その際、言葉にできない部分をどう評価していくかも課題だと考える。しかし、ルーブリックは万能ではない。そこに取り込めないもの（数値化、点数化されない部分）を我々

は持っている方が良い（保健体育科 研究協議の記録より）。

また、次に国語科での研究協議の記録を示すが、参観者からの大変率直な意見と言えよう。パフォーマンス評価の重要性と実用性の間でいかにバランスを図るかという点である。ルーブリックを用いて評価しているが、最も重要なのはルーブリックで評価することではなく、パフォーマンス課題を軸にした授業づくりの発想（逆向き発想）である。この辺りの評価への理解に関して、多くの教員でさらに深めていく必要があるだろう。

・「こうした評価をいつも行なっているのか」「総括的な評価はどのように行う予定か」といった質問がでた。その意図を大胆に推測してみると、「こうした評価をいつも行なっているのか（40人クラスにこういった評価を頻繁に行うのは大変ではないか？自分の学校に導入することが可能だろうか？）」「総括的な評価はどのように行う予定か（こういった課題の評価だけで成績をつけるのだろうか？こういった評価もやりつつ定期テストも行うのは大変ではないか？こういった課題の評価と定期テストの評価はどういった関係にあるのだろうか？それぞれどれぐらいの比重を占めているのだろうか？）」といったものなのではないだろうか。昨今の情勢を鑑みても、「コンピテンシー・ベース」「ルーブリック評価」「逆向き設計」といった考え方を理解し、またそう言った考え方に共鳴している人は増えてきているはずだ。そういった考え方に賛同しつつも、日々の授業、または自身の勤務校の成績評価の流れの中にどうやって組み込んでいけばいいか、悩んでいる人は少なくないだろう。そういった悩みに答えられるように、「コンピテンシー・ベースのカリキュラム開発」を進め、「パフォーマンス評価」の位置付けを確固たるものにしていくことが、今後の課題なのではないだろうか（国語科 研究協議の記録より）。

4-2 「主体的・対話的で深い学び」

などの授業手法の観点より

本公開研においては、地理と古典Bの公開授業でジグソー法が取り入れられ、主体的・対話的に授業を進めるための工夫が成されていた。しかしながら、それと深い学びを担保することにはまだまだ課題も多いようである。

・授業の成果という点については、このようなジグソー法を取り入れた授業は他のクラスで実施した場合も含

めて生徒が盛り上がりやすいが、学習内容の深さをどのように担保するかは難しい（地理歴史科 研究協議の記録より）。

また、深い学びや資質・能力の育成という観点で、省察や反省性といったメタ認知的な思考が重視される。ライチェン&サルガニク（2006）でも反省性の重要性は指摘されている。深い学びや資質・能力の育成を目指す上では、授業者がどのように学びをデザインするか、どのように生徒に働きかけるか、授業自体の質が一層問われるという指摘も見られた。

・助言講師から、ドイツ語圏での音楽科の学習領域構成について話があった。日本と同じような、表現（歌唱・器楽）、創作、鑑賞のほかに、省察（レフレクション）という音楽について考える活動領域があることが紹介された。今回の実践は、この領域に相当する活動であり、とかく感性という側面から語られることの多い芸術科の学習活動において、考える時間を設定することは重要であるという指摘があった（芸術科音楽 研究協議の記録より）。

・既習のことを用いて解いていこうという資質・能力、メタ的な思考を働かせ考えていくような力を身につけていくことは大事である。等比数列に帰着するところを、生徒が気付くように教師が働きかけられるとよかった（数学科 研究協議助言講師のコメントより）。

4-3 次期学習指導要領を視野に入れた

カリキュラム・マネジメントの観点より

次期学習指導要領の改訂が迫る本公開研では、特に大きな改訂が見込まれる地歴公民科を中心に、改訂を視野に入れた意欲的な取り組みが行なわれた。

・現在策定中の新学習指導要領においては、（中略）主体的・対話的な学びを促すための授業方法や学び方についての規定が組み込まれると想定される。これを契機に、しばしば「暗記物」であるとの批判されてきた地歴・公民科の学習のあり方が、思考力・分析力等を重視したものに変わっていく可能性はあり、その趣旨は現行科目の授業でも生かされてしかるべきだと考えられる。

また、現在本校が取り組んでいる「育てたい生徒像」や「身につけさせたい力」に基づくカリキュラム・マネジメントとの関連づけについては、今後さらに検討が必要だと考えられる（地理歴史科 研究協議の記録

より)。

また、多くの教科・科目で次期学習指導要領の改訂を視野に入れながら、カリキュラム・マネジメントに取り組み、試行錯誤をしている姿が見られた。研究協議の中ではカリキュラム・マネジメントの重要性について議論された。

- ・工芸の2年間のカリキュラムを通して育みたい人間像を踏まえ、「心豊かな生き方を創造するにはどのような工夫をすればいいだろうか?」という本質的な問いを立てている。工芸を通して生涯に渡り心豊かな生き方を創造していけるよう、形や色、素材やイメージなどの造形的な視点から、身の回りの生活環境や社会をよりよく改善する工夫や、自己と工芸の関わりについて、工芸の表現の活動と鑑賞の活動から考えることを、授業の軸としている。それらの活動を通し、身の回りのものや生活環境や社会を多様な視点から捉え直し、新しい価値観を見出す力を身につけ、文化や伝統を継承し、未来を創造していける人間として成長していくことを目指している(芸術科工芸 公開授業の記録より)。
- ・それまでの授業でどのようなことをおさえているのか、どのようなことがおさえられていたら生徒は新しいことを考えやすいのかを見通して単元計画を行う。それまでの授業で得たその種を生かすための教師の手立ては何があるのか、どこまで教師が教えて考えさせるのか、どこを生徒が発見することが重要であるのか、を意識する(数学科 研究協議の記録より)。
- ・今回の研究授業における本校の課題は、「英語表現」の授業の中でいかに表現・発表の機会を創出・確保していくか、また、いかに生徒を動機づけしていくかということであった。(中略)明確なゴールが設定されれば、日本人だけのクラスでも生徒たちは活発に英語で表現・発表を行う。こうした事実からも、的確な目標を設定して授業計画を行う「逆向き設計の授業実践」が非常に有効であることが再確認できた(外国語科英語 研究協議の記録より)。

5. 今後の研究の方向性

最後に、本公開研の課題を踏まえ、次年度の研究の方向性についてまとめる。「コンピテンシー・ベースのカリキュラム開発」という継続的なテーマに取り組み始めて二年が経過しようとしている。また、答申により次期学習指導要領のかたちが見えてきている。改訂と連動し入試改革も始まる。そのような背景の中、やっと

本校としても研究全体が見えてきそうなところまで来ている。

5-1 どのような学校を目指すのか?

～公立校へのモデル校の観点～

文部科学省(2017b)でも議論されているように、国立附属学校は公立校のモデルとしての役割が求められている。本校の魅力をどのようなものと捉え、今後どのように発展させていくのか、本校教員の間での認識を共有していく必要がある。そして、それをどのような公立校に対して、どのように発信していくのか、考えていかなければならない。公立校への還元性を求められる現状において、最も大きな課題と言えよう。

5-2 どのような生徒を育てるのか?

～ゴールイメージ共有の観点～

この課題は、昨年度から継続的な課題である。本校が研究の歩を進めていくためにも、カリキュラムの逆向き設計を実現させていくためにも、共有したゴールイメージが必要である。上記の5-1に示したモデル校像とも関連したものである。そのために本公開研では、「3つの生徒像」や「5つの重点課題」を設定した。この辺りのゴールイメージをより多くの教員で共有し、育てていかなければならない。過去に、本校の教育方針を示す“本物教育”を考えるワークショップを実施したが、「3つの生徒像」や「5つの重点課題」に関しても同様に、話し合い、イメージを揃えていく場面が必要なのであろう。異なる教科・異なる教員経験の者同士が語り合うことで、イメージを創造し、共有する活動を通して、本校のゴールイメージを具体化していきたい。

5-3 どのように生徒を育てるのか?

～カリキュラム・マネジメントの観点～

上記の5-1や5-2の大きな教育研究の方向性を踏まえ、5-3ではより具体的なカリキュラムづくりの観点で、今後の方向性をまとめていきたい。次年度の公開研においては「コンピテンシー・ベースのカリキュラム開発」と共に「カリキュラム・マネジメント」が最も大きなテーマになっていく予定である。

(1) カリキュラム・マネジメントの“コア”

次年度、本格的にカリキュラム・マネジメントに臨んでいきたいと考えているが、その中でカリキュラム・マネジメントをする上での“コア”を強調したい。田村

(2017) などでも、生活科や総合的な学習の時間を中核としたカリキュラム・マネジメントの事例が紹介されているが、本校でも同様のことを意識したい。本校において、“コア” となりうる教科・科目として、①SSH 探究、②現代文 I、③英語の 3 つを挙げたい。

① SSH 探究、特に探究活動の進め方を学んでいる 1 年生の基礎部分が候補として考えられる。“探究すること” がより重視される次期学習指導要領の各教科であるが、それを下支えする意味で、“探究のし方” を教える場はより必要となるはずである。1 年次の SSH 探究で“探究のし方” を学び、それが教科での探究をより充実させる。そして各教科での探究の経験が、2 年次の SSH 探究での探究活動をより高いレベルへと押し上げる、といったサイクルである。

②現代文 I は 1 年次でテクニカル・ライティングを学ぶ科目であるが、ここでの学びは多くの教科・科目につながりを持たせることができる。例えば、1 文（センテンス）を書く目安は 50 字程度、それを 4 文程度つなげて、1 段落（パラグラフ）をつくる。1 段落の頭にはトピックセンテンスという最も主張したい文が並ぶ。この知識があるだけで、各教科・科目におけるレポートの書き方の指導や評価の仕方が変わって来ることだろう。

また、本公開研にてシンポジウムとして仲矢史雄先生（大阪教育大学科学教育センター特任准教授）を招き、探究活動のあり方について考えた。その中で「根拠＋主張（結果）」という組み合わせで文章を書くことが重要であるというお話があった。この辺りが教員に共有されるだけで、説明文の書き方の指導や評価は大きく変わることだろう。このように多くの教科・科目で“文章を書く” ことが行なわれている以上、文章の書き方を指導する現代文 I がカリキュラムの“コア” となりうるのである。

③英語においては、次期学習指導要領の改訂に際し、4 技能（聞く・話す・読む・書く）の育成が強調される。より“ツール” として英語を使うことが求められると言った良い。そのような観点に立つと、各教科・科目と接点をつくり、英語を使う場面をより増やす工夫が求められるだろう。

以上のように、闇雲に教科・科目間の接点を増やすのではなく、カリキュラムの背骨となるような“コア” をつくり、それに接点を増やした方が、カリキュラム全体としての統一性・方向性が明確になりやすいと考える。

(2) “本質的な問い” と教科の意義

本公開研では、前回の公開研での西岡加名恵先生（京

都大学大学院教育学研究科教授）のご示唆を踏まえ、各教科・科目で“本質的な問い” を設定した。今後、カリキュラム・マネジメントを進めていく上でも“本質的な問い” は継続的に取り入れていきたい。今後の“本質的な問い” の設定に当たっては、答申で強調されている“教科・科目での見方・考え方” が参考になるだろう。教科の本質とも言える“教科・科目での見方・考え方” に加え、本校の生徒の現状を鑑みて、“本質的な問い” を設定することが重要である。

また、カリキュラム・マネジメントの観点に立つと、一つの教科ですべての資質・能力を育成していくことは困難である。つまりカリキュラム上の役割分担が大切なのである。教科・科目で資質・能力を育成することが得意となる分野を見極め、カリキュラム上でそれぞれの教科・科目の役割を明確にさせることが重要である。答申において、“教科の意義” と表現しているものに近いだろう。

(3) 評価の観点とパフォーマンス課題の充実

カリキュラム・マネジメントをする上で、生徒をどのような観点で評価するのは最も重要な視点と言えよう。成績をつける上での評価の観点は、最も明確な教師から生徒へのメッセージと言える。例えば、ペーパーテストだけで評価するのと、何らかのパフォーマンス評価を成績に組み込むのでは、取り組む教師も生徒もモチベーションに大きく違いが生まれることは容易に想像がつくことだろう。次期学習指導要領においては、“学力の 3 要素”（「知識・技能」、「思考力・判断力・表現力等」、「主体的に学習に取り組む態度」）での観点別評価になる予定である。どのようなパフォーマンス評価をそれぞれの観点到組み込んでいくのかを、教師は明確に示し、生徒と共有することがこれまで以上に重要であると言える。より柔軟で、多角的な評価が今後さらに期待される。

6. おわりに

本論では、本公開研を「パフォーマンス課題の設定や評価」「『主体的・対話的で深い学び』などの授業手法」「カリキュラム・マネジメント」の 3 つの観点より分析し、課題を見出した。また、その課題を踏まえ、「公立校へのモデル校」「ゴールイメージ共有」「カリキュラム・マネジメント」の 3 つの観点から今後の研究の方向性を示した。

上記の議論より、今後もコンピテンシー・ベースのカリキュラム開発を継続し、本校のより良いカリキュラム

づくりに邁進していきたいと考える。次期学習指導要領改訂の議論を睨みつつも、目の前にいる生徒の変容を第一の目標に掲げ、本校の教育活動の更なる充実に向け、教育研究をデザインしていきたい。

引用文献

- SULE 委員会 (2015) 高等学校におけるコンピテンシーの育成に焦点を当てた授業の開発：ルーブリックを用いた評価の実践の事例研究。東京学芸大学附属高等学校研究紀要 53, 107-144
- 研究部 (2016) コンピテンシー・ベースのカリキュラム開発 ～「教科の本質」に根ざした授業実践とその評価 第15回公開教育研究大会を受けて～, 東京学芸大学附属高等学校研究紀要, 54, 57-82
- 坂井英夫 (2017a) 簡単に製作可能で、高性能なマンガン平面電池 (コイン袋電池) の製作, 平成28年度研究発表集録, 56, 34-35
- 坂井英夫 (2017b) マンガン平面電池 (コイン袋電池) の製作－簡単に製作でき、高性能な電池の開発－, 平成29年度全国理科教育大会埼玉大会研究発表論文(資料)集, 39, 134-137
- Sakai H. and Kamata M. (2017) Planar Manganese Battery for Inquiry Learning in Senior High School Chemistry. In Proceedings of The 7th International Conference for NICE, Korea, 56, 2017.
- 佐藤亮太 (2017), 数学的プロセス「目的に応じた式変形」の質を高めることを意図した単元計画, 東京学芸大学附属高等学校研究紀要, 55, 31-40
- 菅原幹雄 (2017), 課題を発見する力を育む授業 - 2次関数を題材として -, 東京学芸大学附属高等学校研究紀要, 55, 41-52
- 田村学 (2017) カリキュラム・マネジメント入門, 東洋館出版社
- 東京学芸大学附属高等学校 (2017a) 平成24年度指定スーパーサイエンスハイスクール研究開発実施報告書 (第5年次)
- 東京学芸大学附属高等学校 (2017b) 東京学芸大学附属高等学校 第16回公開教育研究大会 大会要項 研究主題「コンピテンシー・ベースのカリキュラム開発(2)」
- 東京学芸大学附属高等学校 (2016) 東京学芸大学附属高等学校 第15回公開教育研究大会 大会要項 研究主題「コンピテンシー・ベースのカリキュラム開発」
- 東京学芸大学附属高等学校 (2015) 東京学芸大学附属高

- 等学校 第14回公開教育研究大会 大会要項 研究主題「コンピテンシー・ベースの授業開発」
- 松本隆行, 加戸百合, 坂井英夫 (2017) マンガン平面電池の製作と評価－科学的な手法で考える実験教材の開発－. 平成29年度全国理科教育大会埼玉大会研究発表論文(資料)集, 39, 138-141
- 文部科学省 (2017a) 高大接続改革の実施方針等の策定について
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/29/07/1388131.htm (2018年1月8日)
- 文部科学省 (2017b) 教員需要の減少期における教員養成・研修機能の強化に向けて一国立教員養成大学・学部, 大学院, 附属学校の改革に関する有識者会議報告書一
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/077/gaiyou/1394996.htm (2018年1月8日)
- 文部科学省 (2016) 幼稚園, 小学校, 中学校, 高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について (答申), 中央教育審議会
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1380731.htm (2018年1月8日)
- ライチェン, D.S.・サルガニク, L.H. (2006) 「キー・コンピテンシー－国際標準の学力をめざして－」(立田慶裕監訳) 明石書店